第１部
参加型による学び

2007 年度解放大学ゼミの議論から

2
教材づくりの実践から

1 参加型での教材づくり

なにを教材としてとりあげるか ／どのようなアプローチがあるか

身近なことと原理原則から考えていくことの利点と限界

第１部１で「なぜ同和問題を参加型学習で扱うのは難しいのか？」を考えましたが、この質問をしたときに、もっともよく出てくる意見が「身近な問題でなさそう」でした。人権教育・啓発に取り組む際に「身近なことから考える」ことが大事だという意見もよく聞かれます。

他人事にならないように身近なことから考えたいという意見はもっともなようですが、「身近なこと」ならば本当に他人事にはならないのでしょうか？　身近な事例から学ぶことの落とし穴、危険はないのでしょうか。

ゼミでは、「身近なこと・具体的なこと」から考えることと「概念・原理原則」から考えていくこと、それぞれの利点と限界を、四象限で分析していきました（**次ページ表参照**）。

概念や原理原則から考えていくというのは、例えば「世界人権宣言ではこういうことがうたわれています。しかし、同和地区の現状をみるとこういう現実があります。こういうところが守られていません」、というふうに考えていくようなやり方です。「概念」「原理原則」というと、どうしても抽象的でとっつきにくいと感じられ、そうした視点で教材をつくることはとても難しく考えられがちです。

逆に、「具体的なこと」から考えていくということは、同和問題をまず取り上げ、そこから普遍的な人権の価値につなげていくということです。教材づくりにおいては、「具体的なこと」から考える方がやりやすい、と思われることが多いようです。

分析の結果、「他人事っぽい」ということが、「身近・具体例」のところと「概念・原理原則」のところと両方に出てきました。身近な具体的な話だと自分にひきつけて考えられそうにも思うのですが、ピンとこない場合はむしろ「そんな大変な人がいるんや」というふうに距離をもって他人事になってしまう可能性もあるということです。「個人の体験にひっぱられる」「自分の経験を絶対化してしまう」ということがまさにそうです。

さまざまな具体的な例をあげながら、「Ａもそうだし、ＢもＣもそう。だから、これはこう言えるんとちゃうの？」と話しても、「でもＤは違うよ」「わたしが知っているＥはそうではない」といわれたらそれ以上話を続けることが難しくなってしまう、ということです。こうしたやりとりはさまざまな人権問題を考えるときに予想されます。

＜表＞

	利点・いいこと	限界・むずかしいこと
身近・具体例	・ 分かりやすい （感情が動きやすい、気づきにつながる） ・ イメージしやすい（伝統、習慣、結婚差別） ・ 意見が言いやすい ・ 自分ごととして考えられる ・ 多様な事例が出る ・ 自分の経験と結びつけやすい ・ 背景が共通認識にできる ・ 行動につなげやすい ・ 最後に、他の課題との共通点がわかる ・ 詳しい事情を追加して話せる ・ 葛藤がおきる	・ 生々しくてしんどくなる ・ 個別的な話になる（なりすぎて意見が出しにくい） ・ 問題を掘り下げていきにくい ・ 整理できない ・ 伝えたいことが混乱する ・ 利害関係と結びつく ・ ふだんの人間関係に引きずられる ・ 経験しないと出てこない ・ 他人事っぽい ・ 自分の経験を絶対化してしまう ・ プライバシー、当事者への配慮 ・ 対症療法に陥る ・ 感情的になる ・ 個人の体験にひっぱられる ・ 葛藤がおきる
概念・原理原則	・ 分かりやすい ・ イメージしやすい ・ 広がりがある ・ 別のことと置き換えやすい ・ ものごとを整理しやすい ・ めざすもの、到達点が明確 ・ 直接の経験がなくても意見が言える ・ 法律の精神をいかせる ・ 考えるときに、もどるところ ・ 全員が当事者⇒個別課題へ応用	・ 論理的に難しい ・ 他人事っぽい。とっかかりにくい ・ 理解するのに一定の学力必要 ・ タテマエ論（ホンネは別）になりやすい ・ キレイごとばかりになる可能性 ・ 発想が乏しくなる ・ 法律がなくなったのでわかりにくい ・ よりどころになる

（2007 年度解放大学ゼミ生作成）

たとえば外国人の参政権の問題について考えているときに「でも私の知っている在日の人、選挙権なんていらないって言ってましたよ」という意見が出て、そこで話が止まってしまうのです。あるいは同和問題についても、週刊誌などで「もう触れないでくれ」という同和地区の人からの手紙－いわゆる「寝た子を起こすな」といわれる意見－が掲載されているのをみて、読者が「ほら、同和地区の人も『触れないでくれ』といっている。やっぱり一部の騒ぐ人たちがおかしいのだ」と全体化されることがあります。またはその一経験談をもとに「女性というのは本当にヒステリックだ」というふうに、女性全体の話にされたりするのです。経験から得た考えというものは、そういうことになりやすいのです。

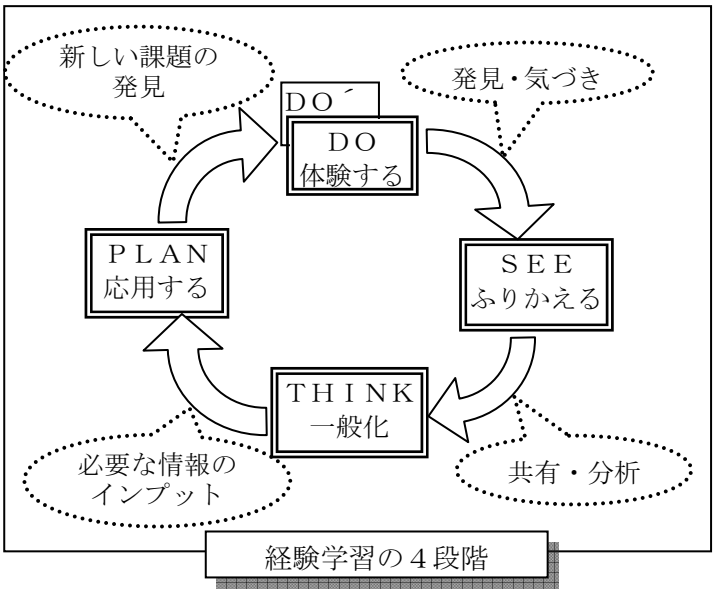
ですから、身近に考えやすい具体的なことから入ったとしても、個別の事例を越えて、概念で整理したり原理原則化することが非常に重要なのです。また逆に、概念からアプローチしても「でも人権というのは生身の一人ひとりの痛みに関わることだ」という具体を押さえなければなりません。原理原則を学んでも、個別の事例に落とせなければ意味がないのです。どちらからアプローチしても、どちらの要素も踏まえたやり方をしなければならないのです。

新たに教材を作る際には、身近なこと・具体的なことをとりあげたいと考えることが多いですが、どういう概念・原理原則につなげていこうとしているのかを明確に意識することが必要なのです。

参加型の教材の基本

経験学習の4段階

■経験学習の４段階



（栗本敦子(Facilitator’s LABO)研修資料より）

この「経験学習の４段階」のサイクルというのは実は、私たちが学ぶときには無意識のうちにやっていることです。

たとえば人間関係で、「あのときこうしたらうまくいったから、今度もこういう工夫をしてみよう」と思うとか、逆に「失敗したからこうしよう」とか。自分のなかでふりかえったり分析したり、場合によっては本を読んで情報を得たりして、普段から無意識のうちにこのサイクルを踏んで学んでいるわけです。その学びの結果、単なる「体験」ではなく「経験」として身についていくのです。

そのような学びを、より効果的に、うまくサイクルが回るように工夫をしたものがアクティビティであり、そのサイクルが参加者同士の相互作用の中で円滑に回るように、適切な質問を投げかけ、働きかけるのがファシリテーターの役割です。

しかし、実際にとりくまれている参加型での人権啓発の中には、「体験する→ふりかえる」のところの気づきまでで終わっているものも多いようです。それでは、教材（アクティビティ）としては不十分です。気づいたことをもとに一般化し、現実に応用する手がかりを発見するところまでを行ってはじめて、現実に向き合う行動につながる学びになるのです。

さきほどの「身近なことから考える」場合の限界で指摘された、「対症療法に陥る」という課題を例に、「経験学習の４段階」をみてみましょう。具体的な事例をもとにして、「こういう場合はこうしたらいいんだな」というふうに対症療法だけをいくら学んでも、起こってくる現実はディテールが毎回違います。ハウツウとしての対症療法では、想定外の状況に向き合うことができません。

たとえばジェンダーや女性への暴力、セクハラなどについての研修ではよく「結局、これは言っていいの？ダメなの？」といった質問が出ます。しかし、「かわいいね」という一言が、褒め言葉になるときもあれば、セクハラになるときもあるのです。一つの言葉を取り上げて一律に答えが“こう”とはいえない。何が問題かは、関係性、文脈などさまざまなことによって変わってきます。わかりやすい答えが求められがちですが、それでは現実の課題は解決できないのです。

同和問題をはじめ他の差別について考える研修でも同じことが言えるのではないでしょうか。

人権啓発では、現実の社会の中で一人ひとりが課題を解決していける力をつけることをめざしているわけで、そのために参加型学習は不可欠だと思います。身近な事例から考えたら、そこから一般化して、対応の原理原則を学んだり、未然に防ぐための方法を考えたりしなければなりません。

アクティビティを行い、ふりかえった後、「いま、ここ」で他の参加者とともに「共有・分析」した具体的な経験を、もう少し「抽象化・一般化（法則化）」するステップを踏んで、ケース・バイ・ケースで、「必要な情報」をインプットする…というふうに学びのサイクルを回すことが大切です。気づいたことに「なるほどね」という感想だけで終わるのではなく、では実際にどうするの？と、行動計画をつくるところまでするのが非常に大事なのですが、そういった展開が取り入れられていることが少ないと思います。「法則化・一般化」して実際に使えるようなところまでつなげることが、参加型学習では重要なのです。

「アクティビティの最後に、どうまとめればいいかわからない」という質問がよくされます。「まとめる」というと、最後に整理して講義するようなイメージがありますが、「経験学習の４段階」をふまえるならば、最後のステップの前に「必要な情報をインプットする」ということが必要なのです。たとえば「専門家によってこういう分析がされています」と文献や資料を提示したり、「これまでの歴史の中ではこう定義されています」といったポイントを整理したりして、いま、自分たちがこの場の体験から導き出し一般化したことがらとの共通点について、私たちの分析では出てこなかったこんな要素が指摘されているね、といったことを加味するのです。それまでの自分の体験とか、ワークショップ以外の場面での現実の体験とつなげあわせながら、それをふまえてこれからどうしていこう、ということを考えるために有効な資料や情報を提供するのです。

ワークショップのなかでの講義は、まとめとして最後に講義するというよりは、アクティビティをしたうえで、もう少し整理するとか、別の視点を提供するような情報を伝えることが目的だと言えます。

2 実際に作成した教材から

参加型学習の醍醐味

冒頭で紹介する教材、「あなたなら、どう答える？　～カムアウト・立場宣言～」は、あなたが友達のＡさんから「…実は、私、部落出身なんだ」と打ち明けられるという設定で始まるものです。この教材は、昨夏から三度の試行を重ね、その都度ふりかえりながら改訂を加えてきました。

詳細の経過と内容については本編をご覧いただくとして、三度目の試行であった三重県名張市で行われたワークショップでの「ふりかえり用紙」では「いろんな考え方に気づかされました」「人が集まれば、その人数分だけの意見･考え方があるのだということに驚いた」という趣旨の感想を多くいただきました。

考えてみれば、参加者はそれぞれ職業や年齢、性別や一人ひとりの生活歴と、さまざまな顔を持っているわけですから、それゆえに個々人に個性的な意見や考え方があって当然なのです。

にもかかわらず、従来の人権研修では「差別はいけない」「人権は守られなければならない」という当たり前すぎる結論から道を踏み外さないようにという配慮や恐れから、自由な意見表明を自発的に押し殺していた面があったのではないでしょうか。

思い起こせば、部落解放運動の高まりとともに、主に教育現場や行政によって「同和教育」の必要性が叫ばれ、実施され始めたころは、「人権」の概念は今日ほど幅広くはなく、「人権教育」イコール「同和教育」であったことは疑う余地がないでしょう。その歴史と伝統の持つ重量感が、「同和問題」を取り上げる研修を今日的な参加型で行うことを躊躇させているのかもしれません。

それまで差別の実態がほとんど語られることもなく、したがって人びとに知られることもなく、風評による予断と偏見だけが植え付けられていた時期には、実態を訴え、科学的な知識を伝えるために「知識注入型」「講義型」の研修にならざるをえなかったのでしょう。

しかし、先に書いたように、研修の参加者はそれぞれが十人十色の背景を抱えて参加しているのです。「あなたなら、どう答える？」では、あなたの答えに、たとえば「そんなこと気にしなくていいよ」という選択肢が用意されているわけですが、仮にＡさんはそれで満足したとしても、Ｂさんなら「自分が気にしているから告げたのに、そんな軽々しい反応か」と不満を抱くかもしれないわけです。

生身の人と人との関係を考え、語ろうとするとき「いろんな考え方」を知ることは必要ですし、それは「講義型」の研修では獲得することが困難ではないでしょうか。

さまざまな意見に耳を傾け、自らも語り、そしてあらためて自分をふりかえってみる。これが「参加型学習」の醍醐味であり、また、「参加型学習に正解はない」といわれる所以でもあるのでしょう。

■ 教材の開発過程

「解放大学ゼミナールコース」（2007 年６～７月、全５日）において教材を開発。

＊カムアウト・立場宣言について

＊土地差別・校区再編について

＊差別発言について

＊結婚差別について

ほか２編（本報告書ではゼミの様子のみ収録）

→開発したものをその場で実践し、批評と改善の検討を行う。

■ 教材の実践と改善

＊カムアウト・立場宣言「あなたなら、どう答える？」

・「第 38 回部落解放・人権夏期講座」高野山の夕べ（2007 年 8 月 22 日）において、許輝子さんが実践（許さんは、教材開発担当者）。

・「名張市人権・同和教育推進協議会　全体研修会」特別分散会（2008 年 1 月 19 日）において、事務局が実践

＊土地差別「校区再編を考える」

・一般市民対象講座（2007 年 7 月）で、ゼミナールコース全体のファシリテーターをつとめた栗本敦子さんが、開発当日の改善案をうけた教材を実践。

・「第９回人権啓発促進役経験交流会」（2007 年 9 月）において、中山久夫さんが実践（中山さんは、教材のみをみて実施）。参加者とともに改善の討議。

・「第 22 回人権啓発研究集会」分科会（2008 年 2 月 14 日）において、中山さんが上記の改善の討議をふまえた再改訂版を実践。参加者および集会講師の西田さんよりコメント。

＊差別発言「“うわさ”に返す言葉」

・「第９回人権啓発促進役経験交流会」（2007 年 9 月）において、田中千恵さん・田中弓子さんが実践（田中さんは、教材のみをみて実施）。参加者とともに改善の討議。

＊結婚差別「不安のもとは？」

「“うわさ”に返す言葉」と「不安のもとは？」は「パイロット版」として掲載

教材開発の評価について話しあう
（人権啓発促進役経験交流会にて）

あなたなら、どう答える？

対　　象：中学生以上
人　　数：何人でも
所要時間：約４５分

ねらい

同和地区出身者は、自分の立場を周囲の人に言うか言わないかで悩まなければならない現実について考える。
就職差別や結婚差別、直接的差別発言だけが問題なのではなく、「差別を受けるかもしれない」という日常の抑圧の深刻さに気づく。

準備するもの

「あなたなら、どう答える？」ワークシート（人数分）、模造紙、マーカー

すすめ方

1．「あなたなら、どう答える？」ワークシートを配布し、下記のように問いかける。「あなたの仲のいい友達や親しい人などの顔を思い浮かべてください（今の友達でも、中高時代の友達でも結構です）。その友達をＡさんとして、ワークシートをみて考えてください」。シートをみると「答え」を書かなければいけないと思う参加者もいるので、シートは回収しないこと、後で答えあわせをするような活動ではないことを伝える。
2．４～５人のグループにわかれてもらい、各自の答えと選んだ理由について、模造紙に書き出してもらう。そのとき、後で各グループから発表をしてもらうことを伝え、模造紙に記録する人と、発表する人を決めてもらう。様々な意見を挙げてもらうことが大事なのであり、結論を出すことが目的ではないことを伝え、ブレーンストーミング（９頁参照）の要領で書き出してもらう。
3．各グループから２分程度で全体に発表してもらう。すでに出た意見と似ているものは省略してもらう。
4．次の問いかけをして、再び話し合ってもらう。「Ａさんは、なぜ、あなたを選んで告白したのでしょう。どのような思いがあったのでしょうか」「あなたの応えはＡさんの期待（思い）に応えているでしょうか？　期待に応えるには、どんなふうに応えればよかったでしょうか？」話しあった内容を模造紙に書き出す。
5．各グループから発表してもらう。
6．ふりかえりと解説を行う。

実施上の留意点

このワークの「ポイント」は、選択肢として挙げてある「答え」が一言であることです。とりあえず一言目を選ぶだけなので、誰にでも答えやすくなっています。また、「一言だけ選べという設定に無理がある」と感じる人にとっては、その後にどんな言葉を続けるのかを説明したい気持ちが強まるということもあります。
答えを決めることが目的ではなく、「選んだ理由」を話し合うことを重視してすすめてください。たとえば「そんなこと気にしなくていいよ」という答えを選んだ人でも、相手の思いをあまり深く考えずに言っている場合もれば、相手の伝えた重みをよく想像した上で一言目にあえてこの言葉を選んでいる人もいるわけです。
この教材の「実践記録」を参考にして、話し合いが深まりにくいときにどのような問いかけをするかを事前に想定しておくとよいでしょう。

人権啓発のワークショップでは、参加者が「正解」を読もうとする雰囲気になる場合がありますが、このワークシートの選択肢に正解があるわけではもちろんありません。ファシリテーターは、「選択肢の一言」に続く言葉を話し合ってもらうことで、一概に正解はないことを考えてもらえるように意識してください。
全体のふりかえりの際には、ファシリテーターがカムアウトに関わる経験などを語るのも良いでしょう。または、「2000年の大阪府民意識調査の結果によると、結婚相手に『自分は部落出身者である』ことを告知した人のうち、約3割の人が差別を体験しています」など、カムアウトをすることで起きている現実を伝えます。

ワークシート　あなたなら、どう答える？

ある日、友達のＡさんに「話したいことがある」と相談されました。

Ａさん：今まで誰にも言ってなかったんだけど…実は、私、部落出身なんだ。
あなた：「　　」

あなたならどう答えますか？　下の選択肢の中から選んでください。
また、その答えを選んだ理由をメモしてください。

①　「知ってたよ」
②　「そんなこと気にしなくていいよ」
③　「関係ないよ」
④　「部落って何？」
⑤　「言ってくれてありがとう」
⑥　「大丈夫！」
⑦　「一緒に頑張ろう！」
⑧　その他（ご自身で考えた答えなどをお書きください）

選んだ理由

校区再編を考える

対　　象：成人
人　　数：約４０人
所要時間：約６０分

ねらい

学齢期の子どもの減少などによって、各地で校区再編が行われている。そのとき、校区統合に対して反対をする理由として、「同和地区と同じ校区になりたくない」といった差別意識があらわになるケースが起きている。
このワークでは、４段階のワークシートを使い、自分は意図的に差別をしようとしたわけではなくても、差別的意図を隠して行動する人の行為に加担する可能性があることに気づく。また、意図的な差別行為でなくても、差別が現存する社会の中で、同和地区の人たちがどのような抑圧を受ける可能性があるのかを考える。

準備するもの

「校区再編を考える」ワークシート①～④（Ａ３に拡大してグループ数分）、サインペン

すすめ方

１．参加者に、５～６人のグループをつくってもらう。
２．「校区再編を考える」ワークシート①を配布し、読み上げる。
３．シートの問いについて話し合ってもらう。そのとき、後で発表してもらうことを伝え、記録をとる人、発表する人を決めてもらう。でてきた意見をワークシートの上半分に書いていく。
４．各グループから簡単に発表をしてもらい、板書する。
５．シート①、②、③についても配布し、読み上げて、話し合いをしてもらい、発表、板書していく。
６．４枚のシートについて話し合った内容をふりかえりながら、差別につなげないために各段階でどういう対応ができたかを考えて、ワークシートの下半分に書く。
７．各グループから発表してもらう。
８．ふりかえり。全体を通して気づいたことがあれば出してもらう。

実施上の留意点

話しあいにあたっては、できるだけいろいろな可能性を考えてもらうように働きかけましょう。
同和地区に対する土地差別につながるような発言がでなかったとしてもかまいません。「ねらい」にもある通り、差別のある社会では、無意識の言動が差別に加担することにつながることもある、ということを考えるきっかけになります。
そのうえで最後に、最近起きている同和地区を含む校区再編問題について資料などを用いて説明します。

参考文献

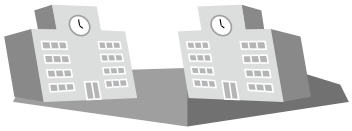
『土地差別　部落問題を考える』奥田均、解放出版、2006年。『人権問題に関する府民意識調査報告書』大阪府、2006年。

その１

校区再編を考える

あなたが住んでいる地域は、Ａ小学校の校区です。
市内の子どもの数が減ってきていることをうけ、隣のＢ小学校と校区をひとつにする計画がある、と市の広報誌で読みました。
それに対し、最近、市民の中に校区統合反対の動きがでてきている、という話をききました。

Ｑ．校区統合に反対している人たちは、なぜ反対しているのでしょう？



その２

校区再編を考える

校区統合に反対している人たちは、署名活動をはじめました。
あなた自身は、賛成・反対ということにとくに考えはないのですが、ある日、近所の知り合いがやってきました。反対署名に協力してほしいというのです。きくと、住民の多くが署名しているといいます。

Ｑ．あなたは署名しますか？　するとしたらどうしてでしょう？

その３

校区再編を考える

後日、近所の人と世間話をしていると、校区統合の反対署名のことが話題にのぼりました。
なかの一人が「Ｂ小学校の校区には同和地区があるからねぇ」と言いました。
署名用紙の反対理由には、そのことは何も書かれていませんでした。

Ｑ．この発言をあなたはどう思いますか？　また、その場でどう受け答えしますか？

その４

校区再編を考える

署名はたくさん集まり、市に提出されましたが、市の校区統合の流れは変わらないようです。
ある日バスに乗っていると、親子づれが前の席に座りました。子どもはＢ小学校に通っているようです。やりとりの中で、子どもが「ウチの学校、みんなに嫌われてるんかなぁ」というのがきこえてきました

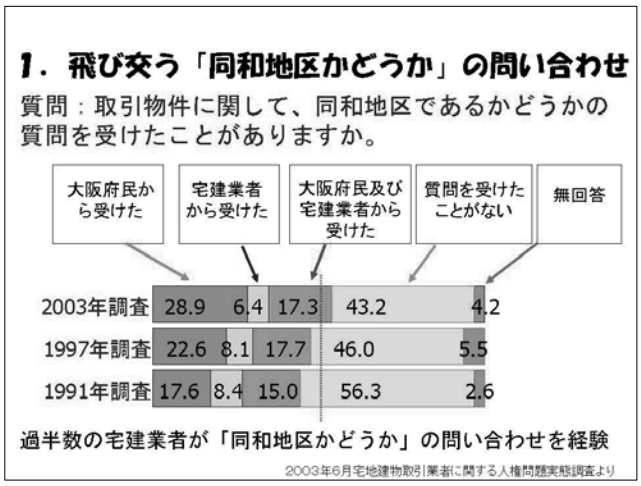
Ｑ．この子どもの言葉を聞いて、あなたはどう思いますか？
Ｂ小学校（の校区）では、どのようなことがおこっているでしょう？

■「校区再編を考える」補助資料

「校区再編を考える」ワークショップの補助資料として、近畿大学教授奥田均さんからご承諾を頂き、奥田さんのご著書である『土地差別　部落問題を考える』を主に参考にして、資料をつくりました。ご活用ください。

中山久夫（クラシエホールディングス㈱）

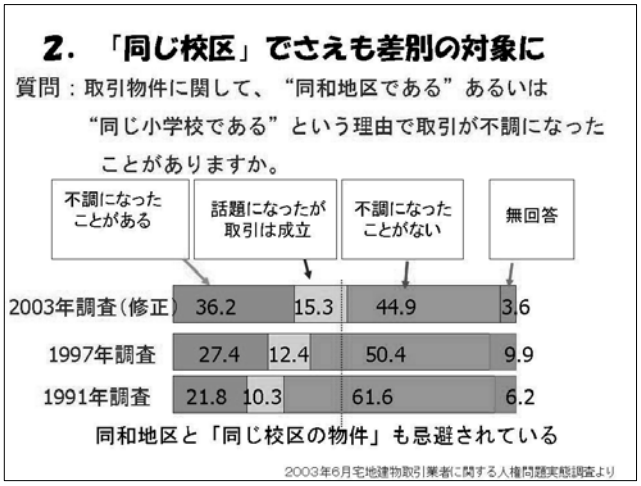
１．飛び交う「同和地区かどうか」の問い合わせ



このグラフは、大阪府内の宅建業者が府民や同業者から、「取引物件が同和地区かどうか」という質問を受けたことがあるかどうかの経験を調査した結果です。２００３年調査では、「大阪府民から受けた」「宅建業者から受けた」「大阪府民及び宅建業者から受けた」合計が５２．６％と半数を超えました。とりわけ府民からの問い合わせが増えています。

また、こっそりと問い合わせるのではなく、堂々と露骨に問い合わせるケースが、各地で繰り返されています。

２．「同じ校区」でさえも差別の対象に



このグラフは不動産取引の現場で「物件が同和地区のものであった」あるいは「校区に同和地区を含む」ために、取引が不調に終わったことの経験を宅建業者に尋ねた結果です。

調査は宅建業者全員を母数として数値を算出していますが、しかし実際はこうした取引の不調は「取引物件が同和地区のものであったかどうかの質問を受けた」状況のもとで通常発生するものです。そこで質問を受けた宅建業者全員を母数として算出し直した数値が2003 年の修正値です。「取引物件が同和地区のものであったかどうかの質問を受けた」業者において 36.2%の業者が取引の不調の経験があるとしている現実は、「同和地区の物件」や「同和地区を小学校区に含む物件」が大変高い割合で取引不調に追いやられていることを示しています。

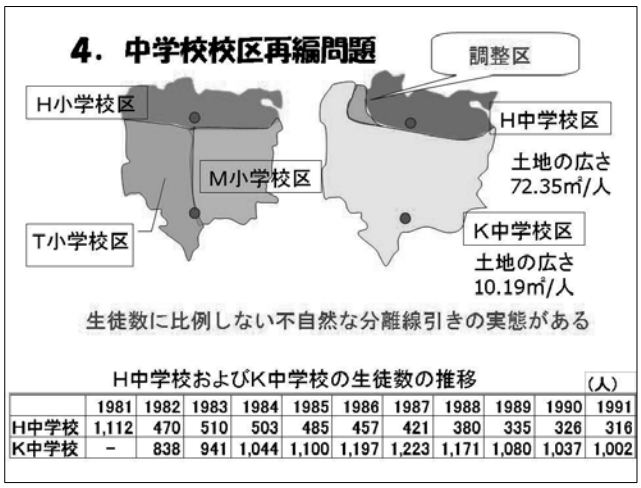
３．不動産広告のチラシに関する調査

不動産業者と宅件業者、そして顧客である市民を結びつけるのに大切な情報を提供しているものに「不動産広告のチラシ」があります。パイロット調査として大阪府八尾市内の新聞広告についてくる不動産広告のチラシを１年間調査したところ、延べ紹介物件数 3,770 件のうち、校区名が表示されていたのは 380 件ありました。およそ 10 件に１件の割合です。

八尾市内の小学校 29 校のうち 24 校もの学校の名前がチラシに登場していることから考えると、それらの学校が「いい学校」であるということではありません。非表示の小学校５校のうち、地理的事情がある２校を除き残り３校がいずれも当該校区あるいは中学校区に同和地区があることをふまえるとき、校区名表示は「広告に校区名表示がなされておれば、それは同和地区を有する校区内の物件ではありませんよ」ということを暗に市民に知らせる役割を果たしているといわねばなりません。

現在の部落差別は巧妙に分かり難いところで行われて温存されています。

４．中学校校区再編問題



H中学校およびK中学校の生徒数の推移　（人）

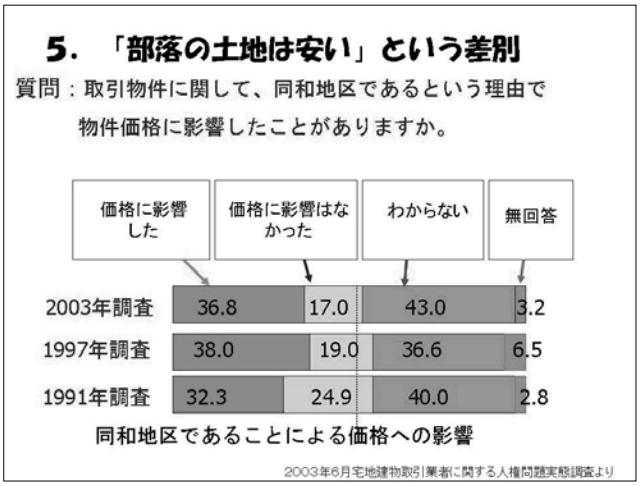
	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991
H中学校	1,112	470	510	503	485	457	421	380	335	326	316
K中学校	－	838	941	1,044	1,100	1,197	1,223	1,171	1,080	1,037	1,002

大阪府東南部のある市は、ベッドタウンとして宅地開発が進み人口が増えたため、1982 年に中学校の校区を再編することになりました。ところが、図のように不自然な線引きがなされた結果、再編後、Ｋ中学校は３年目にして千名規模のマンモス校になった一方、校区内に同和地区があるＨ中学校は、生徒数不足によりクラブ活動の多くが活動停止を余儀なくされたり、諸行事の負担が大きくなるなどの教育権の問題を生じました。

こうした異常な校区分割に対し、地元の部落解放同盟向野支部をはじめＨ中学校ＰＴＡは、「市内 6 中学校の生徒数のアンバランスをなくし、Ｈ中学校の適正規模化を進める校区再編を請願する署名」の運動を展開し、3,345 人分の署名が集まりました。その結果、市教委もこの問題の検討作業に着手しました。ところが、翌 1988 年、隣接するＫ中学校の地域住民より「教育委員会の校区再変更案に反対する嘆願書」が 7,092 人の署名を添えて提出されたのです。その後もねばり強く働きかけは進められていますが、状況は改善しないまま現在にいたっています。

なかでも注目すべきは、「これは子どもの教育の問題だけではない。校区が変わると地価が下がる。ようやく手に入れた住宅の資産価値が下がるんだ」とまことしやかに流された言葉のなかに、地域をあげて反対署名が展開されていった背景の一端を垣間見ることができます。

５.「部落の土地は安い」という差別

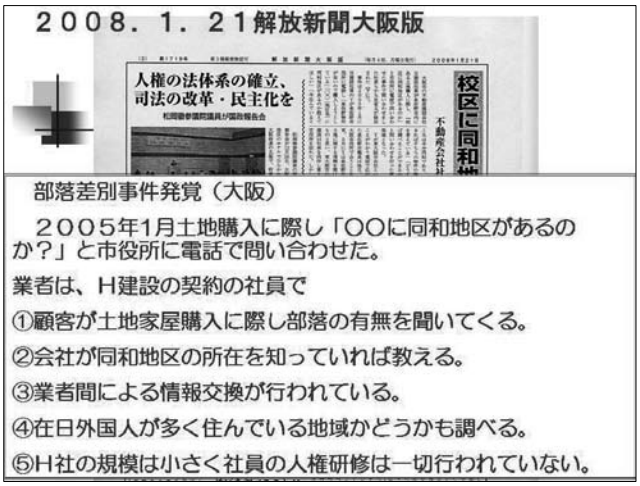


不動産売買における部落差別は、同和地区の土地は相対的に安いという現実に現れています。「価格に影響した」と解答した業者は、2003 年調査では 36.8%にのぼっており依然高い割合を示しています。「価格に影響はなかった」はわずか 17%でむしろ減少傾向すら示しています。

同和地区の物件は人気が少なく、相対的に低い価格を押し付けられている様子が調査結果からうかがえます。そのことが前述の差別問い合わせ事件などを繰り返す結果ともなっていると考えられます。

６．忌避意識の克服を

『解放新聞　大阪版』によると、２００５年１月に、H建設の契約社員が土地購入に際し「〇〇に同和地区があるのか？」と市役所に電話で問い合わせた事件が報道されています。確認糾弾会では下記のような事実が明らかにされました。



①顧客が土地家屋購入に際し、部落の有無を聞いてくる。
②会社として同和地区かどうかの情報を知っていれば、客に教える。
③業者間による同和地区の情報交換が行われている。
④在日外国人が多く住んでいる地域かどうかも調べることがある。
⑤H社の規模は小さく社員の人権研修は一切行われていない。

部落差別解消には忌避意識を克服することが大切です。そのためには研修を繰り返し行うことが大切です。

【参考】2000 年（平成 12 年）12 月、「人権教育及び人権啓発の推進に関する法律（人権教育・啓発推進法）」施行。法律の目的には、「人権の尊重の緊急性に関する認識の高まり、社会的身分、門地、人種、信条又は性別による不当な差別の発生等の人権侵害の現状その他の人権の擁護に関する内外の情勢に鑑み、人権教育及び人権啓発に関する施策の推進について、国、地方公共団体及び国民の責務を明らかにするとともに、必要な措置を定め、もって人権の擁護に資すること（第１条）」が定められています。またこの法律を具体化するための国の計画として、「人権教育・啓発に関する基本計画」が策定されました。（２００２年３月）

「よい教材」とは？　教材を活用するにあたって

この章の冒頭で述べたように、教材は使うごとに改訂を重ねていくことができます。

そのとき、掲載されている本を読んで教材を評価するのではなく、実際に体験しながら評価をするために、下記のようなチェックリストを作成しました。

これらは、本報告書に掲載された教材を実践・改訂する作業の中で、参加者のみなさんと考えた視点をもとにして作成しています。参考にしてください。

教材評価のための２０のチェックリスト

教材の書き方

- □　教材の目的がはっきり理解できるか
- □　手順はわかりやすいか
- □　時間は適切か
- □　人数設定は適切か

ワーク中

- □　考える手立てははっきりしていたか
- □　「問い」は伝わりやすかったか
- □　横道にそれない展開か
- □　参加者が無理なく意見を出せるものだったか
- □　「正解」がみえるような展開になっていないか。価値観の押し付けになっていないか
- □　多様な視点、側面から考えられたか
- □　適度な葛藤があったか。参加者が揺さぶられるか
- □　参加者同士で刺激ある意見交換ができたか
- □　頭・心・体のバランスはとれていたか

ワーク後

- □　新たな気づきは得られたか
- □　日常の自分の課題としてとらえられたか
- □　今後の自分の行動につながるものであったか
- □　今後の行動へ意欲をわき起こせたか
- □　問題の本質をみつめることができたか
- □　体験したことが一般化・法則化につなげられているか
- □　発展性があるか

（「第９回人権啓発促進役経験交流会」参加者の意見をもとに作成）

パイロット版

“うわさ”に返す言葉

対　　象：高校生以上
人　　数：約４０人
所要時間：約６０分

ねらい

差別発言に出会ったときに、自分は何ができるのかを具体的に考える。
よく知る友人に対する“うわさ”に反論する場合と比較しながら、自らの同和問題への意識を振り返る。
同和問題についてよく知らないままで差別的な“うわさ”を聞くと、そのまま信じてしまいやすい。人権研修の意義を説明する。

準備するもの

「“うわさ”に返す言葉」ワークシート①②（グループ数分）、模造紙、マーカー

すすめ方

1．「“うわさ”に返す言葉」ワークシート①の状況（囲みの中）を説明し、ロールプレイに協力してもらう人を一人募る。
2．ファシリテーターがＡさん役をし、参加者にＢさん役をやってもらい、ロールプレイをする。
3．参加者に、自分がＢさんならどんな言葉を返すか、グループで話しあい発表してもらう。
4．グループから発表された言葉で“解決編”のロールプレイをやってみる。時間の許す範囲で、いくつかのパターンをやってみてる。
5．それぞれのパターンを比較しながら、気づいたことを話し合う。
6．同じ要領で、シート②についてもロールプレイをやってみる。
7．「２つのエピソードを比較して、どちらが対応しやすかったですか？　それはなぜでしょう」と問いかけ、気づいたことを話しあう。出てくる意見にあわせて、同和問題に対する参加者の意識をふりかえってもらえるような問いかけをする。
8．差別発言に対応するときの課題と手立てを話しあい、共有する。

実施上の留意点

Ａさん役は、必ずファシリテーター（または事務局）がやってください。差別的発言をする役割を、参加者にさせないようにしてください。
ロールプレイについては、シナリオどおり終わってもいいですし、Ａさんとして「そうは言うけどな」などと、先の展開を考えてやってみるとお芝居としての雰囲気は盛り上がるでしょう。
ワークシート②のエピソードは差別発言を取り扱っているだけに、たとえロールプレイでも参加者は見ていてショックを受けることが予想されます。それだけに、「返す言葉」を参加者みんなで考えて、何度もロールプレイをすることが大事です。差別発言に対応する方法を力をあわせて考えていくことで、ショックを受けた参加者の気持ちが前向きになれるような雰囲気をつくることを意識してください。
時間がないときには、「５．」の話し合いを飛ばして、その１、その２を通してのふりかえりにすることも可能です。

解　説

同和問題について、偏見に基づいた話を聞いたときに、「そのとおり」と思うか、「おかしい」と思うかによって、忌避意識を持つかどうかかなり異なることが、意識調査で明らかにされています（2004年三重県民意識調査）。

いったん受け入れられた偏見情報は簡単には修正がきかないと考えられます。偏見の再生産を食い止めるためには、地道な教育・啓発活動に取り組み「第一印象」をネガティブなものにしないことが重要です。

その１

“うわさ”に返す言葉

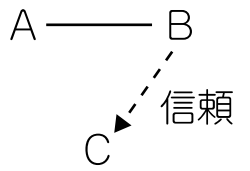
ＡさんとＢさん（あなた）は友人同士です。
ある日、Ａさんから共通の知人であるＣさんについてのうわさ話を聞きました。
あなたはＣさんをとても信頼しています。

Ａ：なぁ、知ってる？　こないだＣさんのことでちょっと聞いてんけど…。

Ｂ：なに？

Ａ：Ｃさん、実は結構平気でウソついたりしてるみたい。あんたも騙されてるかもしれへんし、あんまり信用して付き合わんほうがええで。

Ｂ：「　　」



3人は共通の友人

その２

“うわさ”に返す言葉

ＡさんとＢさん（あなた）は友人同士です。
ある日、Ａさんからうわさ話を聞きました。

Ａ：なぁ、知ってる？

Ｂ：なに？

Ａ：部落で事故起こしたらコワいねんて。あんたも営業であちこちまわってるみたいやし、気ぃつけた方がええで。

Ｂ：「　　」

パイロット版

不安のもとは？

対　　象：高校生以
人　　数：何人でも
所要時間：約４０分

ねらい

部落差別が現存する社会の中では、直接的な差別行為をうけていなくても「差別されるかもしれない」という不安が生まれることを理解する。また、その不安が忌避意識や新たな差別につながる可能性があることを考える。
同和地区を避ける個人を責めるだけでは、部落差別はなくならない。
問題を社会構造から捉え、考えることが必要だということに気づく。
結婚に悩む人の相談を受けた場合、なにができるかを考えておく。

準備するもの

「不安のもとは？」ワークシート　その１（参加人数の半分）、その２（Ａ３に拡大してグループ数分）、サインペン

すすめ方

1．参加者に、２人一組のペアになってもらう。
2．ペアに１枚、ワークシートその１を配り、読み上げる。
3．上司役とＡさん役を決める。上司役の人は、相談を受ける立場で「なぜ不安なの？」とＡさんの気持ちを聞く。時間は２～３分程度（あまり長くする必要はない）。どのような理由があったか発表してもらい、全体で共有する。
4．ペア２～３組で一緒になってグループをつくってもらい、Ａさんが安心できるためには、どうすればいいかを考える。ワークシートその２を各グループに配布し、「わたしが／身近な人と一緒に／社会全体で」と「すぐにできる／長期的に」の６領域で考える。記入できる部分だけでもかまわない。全体に発表してもらう。

解　説

自分（や身近な人）に差別が降りかかってくることを不安に感じる気持ちは、否定されるものではありません。2005年大阪府民意識調査結果をみると、同和問題に対する忌避意識は「現代社会は同和問題に対してどのような姿勢をとろうとしているのか」「世間の流れはどうなっているか」「自分の姿勢はこれらに合致しているのかどうか」など、同和問題をめぐる社会動向に対する認識が、自らの忌避意識形成に強く作用していることが推測されています。差別のある現実に近づかないようにする個人のふるまい、つまり被差別の立場にある人たちと関わることを避ける、という行動が差別のある状況を支えているのです。差別されるかもしれない状況を忌避することは、問題の解決を被差別の側に負わせる姿勢でもあります。差別は、あくまで「する側」の問題であり、社会の課題としての取り組みが大切であることを繰り返し確認する必要があります。また、被差別の立場の人々へのエンパワメントの視点も重要です。
とはいえ、結婚差別の解決はなかなか難しい問題です。話し合った結果、いい対策を考えられずにいると、参加者が無力感に襲われる可能性があります。
このワークショップの後、結婚差別を乗り越えた経験談を聞く場を設けるなどして、解決への展望を示すプログラムもよいでしょう。

ワークシート　その１　不安のもとは？

あなたはＡさんの上司です。
ある日、Ａさんから次のような相談を受けました。

交際相手から「実は自分は部落の出身。結婚したら一緒に部落に住んでほしい」と言われました。

それ以降、本を読むなどして同和問題について勉強し、いろんな差別があることがわかってきました。けれど、問題の深刻さがわかるにつれ、将来、子どもが生まれたら、本に書いてあったような差別を受けるのかもしれないと思い、不安です。

ワークシート　その2

不安のもとは？

	すぐにできる	長期的にやりたい
わたしが		
身近な人と一緒に		
社会全体で		

「あなたなら、どう答える？」実践記録

教材開発の動機

２００７年度解放大学ゼミの中では、まず「『私、部落やねん』と言われたら何て答える？」とブレーンストーミングで出していき、答えの候補を考えた。

その中で「『言ってくれて、ありがとう』と答えた」と言うと、「そう答えるのが大事！」と、まるで正解のように扱われがちではないか、という話も出たが、立場宣言というのは、関係性とかいろんな文脈があってどう受け答えをするのが重要なことなので、正解はないものとして、考えていく教材としてつくっていった。

テーマ：カムアウト・立場宣言
タイトル：「あなたなら、どう答える？」
想定対象：中高生
想定人数：４０人
所要時間：６０分
ねらい：同和地区出身だということを言うか言わないか、で悩まなければならないのは、差別があるからだということに気づく。

すすめ方：

１．「あなたなら、どう答える？」ワークシートを配布する。
２．あなたの仲のいい友達などの顔を思い浮かべてください（今の友達でも、高校時代の友達でも結構です)。その友達をＡさんとして、ワークシートをみてください。①あなたならどう答えますか？　②答えカードの中から、なぜそのカードを選んだか、その理由をメモしてください。
３．４～５人のグループで共有してください。
４．もう１点、考えていただきます。みなさんが選ばれた言葉をＡさんに伝えたとき、カムアウトしたＡさんはどう感じるでしょうか。
　たとえば「そんなこと気にしなくていいよ」という言葉の裏には、気にしなければならないなにかがあるという意識があるのではないでしょうか。
　あなたの選んだ言葉は、Ａさんにどういうふうに伝わったでしょうか。Ａさんはどう受け止めたでしょうか。そういったことを考え、話し合いましょう。
５．グループごとに、「選んだ言葉」「理由」「裏にある思惑／危険性」を発表してもらい、板書する。

「あなたなら、どう答える？」

ある日、友達のＡさんに「話したいことがある」と相談されました。

Ａさん：実は、私、部落出身やねん。

あなた：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

あなたならどう答えますか？　下の答えカードの中から選んでください。
そのカードを選んだ理由を話し合いましょう。

① 「知ってたよ」
② 「そんなこと気にしなくていいよ」
③ 「関係ないよ」
④ 「部落って何？」
⑤ 「言ってくれてありがとう」
⑥ 「大丈夫！」
⑦ 「一緒に頑張ろう！」
⑧その他　ご自身で考えた答えなど

● **話し合いで出された意見**

⑧にして「そうなんや」という言葉を、後の会話を膨らませやすいということで選んだ。その後にどんな言葉を続けるか。軽く聞き流されたと思われるかもしれないし、深い話もできるかも。なぜそのとき打ち明けてくれたのかを知りたい／「知ってたよ」という言葉は、なにか噂されていたのかも、という不安を与えるかも。関係性次第／「関係ないよ。いままでと同じ友達やで」という言葉は、「同じやないやろ！」という思いがあるのでは／「言ってくれてありがとう」は、どういう意味で使うのか。どんなタイミングで言うのか。いろんな話を聞いた上で、この話をする相手として自分を選んでくれたのかという意味で「ありがとう」ならわかるが…。模範回答的に「ありがとう」が一人歩きしてしまうかもしれないが、そこから続ける内容によって違う／内面の葛藤があって伝えていると思う／「部落ってなに？」って言われたら、言われた方は「あぁ、知らないのか」と思うのでは。／「気にしなくていいよ」という言葉。気にしなければならないなにかがあるということをわかって言っているのか？

● **ふりかえり**

教材作成者から

話し合いが活発に行われてよかった。「部落に住んでるねん」と「部落出身」とどちらがいいか、みなさんの意見を聞きたい／「あぶないこと／危険性」という問いかけ方はどうか？⇒「カムアウトした人は、そういわれたらどう感じるか」という問いの方がいいかもしれません。

全体から

答えの候補を具体的に例を挙げてくれていたので選びやすかった。参考になった。選んだ理由を話し合って「そうやな」とわかったけど、そこからもう一歩が書いていなかったので、むしろ、気づきがさらに深まるという感じでよかった。自分の中で「あぁ、そういうこと考えなアカンなぁ」と思った／段階をわけて、①選んだ答えと理由、②どう相手に受け止められるか、とわけて考えると考えやすいですね／「身近な誰かを思い浮かべて」というのが考えやすかった。イメージがわいた／高校生じゃなくて一般的な状況でいいのでは／PTA の保護者会だとか地区懇談会で、成人が高校時代を思い出してやるのもいいと思った／今の状況があまりにも生々しいなら、高校時代を思い出してというのもいいかもしれない／「私もそうやねん」というカムアウトも出てくる可能性があるから、そこも念頭に入れて考えておくといいかも／これを考えている参加者自身が当事者である場合に、グループディスカッションで「私もやねん」という答えを思いついても言うことがカムアウトになりますよね。そこはちょっと考えておいた方がいいかも。「具体的にカムアウトしたら、この人たちはこういうふうに反応するのか」ということを感じながら参加することになる／個人的には、自分の同和問題とのかかわりの原点に返れた／シンプルなだけに応用がきく／答えのカードがあることで「こう言った方がいいのかな？」と模範回答を選ばなければ、ということを考えてしまうのではないか？と思った／逆に、そう考えてしまう自分があるな、ということを考えられた／そういう反応があることを踏まえてファシリテーターがすすめる必要がある／考えやすいが、すごく深い。「私って思ったとおりのこと言わないわ」と思った。関係が変わるだろうに「変わらないわ」という回答を選んだ自分。結構、いい加減に話しているなと思った／言う―言わないを悩まなければならないということ自体で差別があることがわかる。聞いている方にとっては一言二言だけれど、どんな思いでそのことを言ってくれたのかを考えてほしいと思いました。なぜ言うのか、どんな思いで言っているのかを考えてほしい。

● 改善に向けて

ワークの最後に、ファシリテーターがカムアウトに関わる経験などを語るのも良いだろう。

Q「選んだ言葉と選んだ理由」のところで意見が出てきにくかったり、「えぇやん、気にせんかったら」といった意見しか出てこないとき、もう一歩、踏み込んで考えてほしいときに、どんな問いかけをすれば深まるか？を考える

なぜＡさんはあなたを選んでカムアウトしたのでしょう？／どんな思いでカムアウトされたのでしょうか？　あなたはその思い（期待）に応えたでしょうか？／あなたの答えで、Ａさんが傷つく可能性はないでしょうか

第３８回部落解放・人権夏期講座
「高野山の夕べ」での実践記録（開催日：2007 年 8 月 22 日）

タイトル：「あなたなら、どう答える？」
実践：許輝子さん（とよなか人権文化まちづくり協会）
時間：午後 8：00～10：00　のうち、６０分程度
参加者：３０名

●　ファシリテーターの感想

正直、私なんかがワークショップを進めていってもいいのか？という不安と緊張でいっぱいでした。

この教材を作り上げるきっかけとなったのが解放大学のゼミコースである「学びを深める！人権啓発ファシリテーター講座」でした。

講座でおこなわれたワークショップで、より深く学ぶための「学びあいのルールや心がけ」などを参加者でつくります。その中で「身近なことを題材に」や「具体的なことから学ぶ」といった発言が出てきました。

しかし、「なぜ同和問題を参加型で扱うのは難しいのか」という問いには、「身近ではない」や「身近すぎて扱いにくい」などの発言がありました。身近な問題を扱うのが理想だけど、同和問題はなかなか扱いにくい現実。なぜそのように感じてしまうのか。

その差を埋めていくために必要な学びが参加型学習だと思いました。

「同和問題を教材にする」と一言で言っても、同和問題の中にもさまざまな問題があります。部落の歴史や誇り、結婚差別、土地差別、差別発言など。
どの切り口からどのように作っていくのかも時間をかけて考えていきました。

そして私が「カムアウト・立場宣言」を作ろうと思ったのは、私自身が在日外国人だということが大きく関係しています。

初対面の人に対して自分自身が在日であることを言うべきなのかどうか。

言う必要もなければ、隠す必要もない。だけど、会話の中で「在日」の話題が出たらどうしよう、なんて答えよう、となぜかうしろめたい気持ちにもなりました。

そういった気持ちの中のモヤモヤした部分が何なのか。

言う時と言わない時の線引きは何を基準にしているのか。

自分自身にそんな思いがあったので私はこの教材をつくることにしました。

「高野山の夕べ」では、年代も職業もさまざまな方々にご参加いただきました。

年配の方も何人かいらっしゃって、協力的に参加していただけるかどうか少し不安でした。最初は本当に少ない人数

だったので安心していたのですが、段々と人が増えて最終的には３０人という私の想像以上の人数でびっくりしました。

時間もありませんでしたし、緊張のせいもあってアイスブレーキングも行わず参加者同士の自己紹介などの時間も取れず、とても恥ずかしく情けない促進役だったと思います。

限られた時間の中で、たくさんの議論がされていたように思います。

４人１グループに分かれての意見交換をおこない、各グループから意見の発表をしてもらいました。「昔、教材のような場面に遭遇したことがある」という方も何人かおられたようで、当時と今の発言や感情の違いなども語っていただきました。

「『ありがとう』という答えは、なんだか上から物を言っている気がしておかしい」という意見や、「『ありがとう』は相手に対しての素直な感謝の気持ちを表現しているのだからいいのでは？」などの意見もありました。

その部分を「今の意見はみなさんどう思われますか？」という感じで、参加者に問い返しながら具体的に考えていけばよかったのですが、経験不足の私にはできませんでした。宿坊の広々としたお座敷でのワークだったので、模造紙なども用意しておらず、ファシリテーターが参加者の意見をホワイトボードに書き込んでいきましたが、参加者の発表を一生懸命聞くことに意識が集中してしまい、途中からは意見をホワイトボートに書き込むのを忘れてしまいました。

そのせいで全体に意見を共有できなかったことが悔やまれました。

同和問題ということもあってか、深い溜め息が聞こえてきたり、教材自体がまだ完成したとはいえない状態で、オープンエンドな部分もあり少し自分自身の被差別体験なども加えてまとめにかえさせてもらいました。

まとまりのないワークショップとなってしまい、反省する点が多かったのですが、ある程度自分が想像していた流れになっていたし、すごく緊張しましたがやって良かったと思いました。アンケートにも参加者の温かい言葉がたくさん書かれていたので、安心しました。

あと、この教材を同和問題に限定せずに、「カムアウト」の切り口から「在日外国人」や「同性愛」の問題として展開していくのもいいのではと思いました。

同和問題だからといって身構えるのではなく、参加型学習では「これが正しい答えですよ」というのはないし、ファシリテーターが参加者に正しい答えを求めることもない、ということを踏まえてもっとたくさんの方に知っていただきたい教材だと思います。

●　参加者の感想

講演をきくのもいいが、人と出会えるのがうれしい。ワークシートを通じてディスカッション、とてもよかった。許さんの話し方が心がこもっていてよかった。一生懸命さがよく出ていた。／様々な人の意見、考え方が聴けました。参考にしたいと思います。発表者の方のご苦労に感謝します／いくつかの班にわかれてそれぞれの意見が聞けて参考になった／大勢の方の意見を伺うことができて有意義でした。特に相手への投げかける言葉については、色々ヒントを得ることができたと思います／部落差別についてのことがわかって、よかったと思う／グループで本音の話ができ、貴重な経験になりました／夏期講座の出席は今回が初めてですが、ワークショップ形式だったので、様々な参加者の意見を聞くことができ、自らの考えを調整するのに役立ちました。また、この研修会は他業種の人権啓発担当の方々や、各種人権擁護関連の取り組みに関わっておられる方々の出席もあったので、社会人

としての人権感覚を肌で感じるいい機会になりました／一人一人は様々な意見をもっています。丁寧にひろいあげることが啓発につながると思います。

名張市人権・同和教育推進協議会　全体研修会
特別分散会Ⅱでの実践記録（開催日：2008 年 1 月 19 日）

タイトル：「あなたなら、どう答える？」

場所：名張市役所大会議室

実践：部落解放・人権研究所事務局

時間：午後 1：30～4：00

参加者：約３０名

当日の流れ：前半の流れについては『ちがいのとびら』（編集：財団法人大阪府人権協会、発行：大阪府政策企画部人権室、2007 年）28～30 頁を参考にしました。

ワークショップとは？／アイスブレーキング「名前だけの自己紹介」／同心円になって～傾聴で／「わたしは」ではじまる１０の文章／知り合うために何をきく？／あなたならどう答える？

●　ファシリテーターの感想

今回の実践では、ゼミの教材開発の際にファシリテーターを務めていただいた栗本敦子さんにプログラムについてご相談をしてのぞみました。

参加者は、市内の行政職員の方や、ＰＴＡ連合会・区長会・老人クラブ連合会・子ども会連合会・部落解放同盟名張市協議会など、各団体の方という内訳で、女：男＝１：２程度、年齢は 2、30 代～ご高齢の方まで様々でした。「参加型学習ははじめて」という方も４～５人おられ、うまく参加していただけるか少し心配でしたが、最初の「名前だけで自己紹介」の活動から概ね積極的にご参加いただけました。

アイスブレーキングの後、「知り合うために何をきく？」という自己紹介にかかわる活動をして、「誰にでも、聞かれたくない／答えたくない項目があるのではないでしょうか」という問いかけをした後、いよいよ「あなたなら、どう答える？」の活動に入りました。

ワークシートについて、各自で作業をしていただいた後、グループでの話し合いに入っていただきました。グループによって話し合う内容はまちまちで、このワークシートをみただけで「Ａさんの思いとしては…」と踏み込んだ意見を言われている参加者もおられれば、グループのメンバーみんなが「自分とは関係ない」といったトーンの意見を出されたグループもありました。

グループの話し合いの深まり方にバラつきはありましたが、すべてのグループが模造紙に書き出す作業に取り掛かった頃に、次の問い「あなたの答えは、Ａさんの思いに答えているでしょうか？Ａさんは何を期待していたのでしょうか？」を投げかけました。ここでの話し合いもグループによってかなり差がありました。

ただ、私が各グループをみていたところ、一人の高齢な男性の反応がこの問いかけで変わったように思いました。それまではワークシートをみて「こんなん『寝た子を起こすな』って言うんやろうけど、変に知らせん方がえぇねん」というような意見で、この後のやりとりでどう展開するのか気になってみていました。それが「Ａさんの期待に応えていたかどうか」という問いかけについて、

同じグループの他の方が「一緒になって悩みの相談にのってほしいから」「Ａさんが差別に立ち向かうための力になってほしいから」といった意見を出されてから、それまで演説のように話されていた彼の口数が減り、考えこまれているようでした。その後の話し合いではしみじみと「そういう気持ちがあるんやなぁ」といったふうに話しておられたようでした。

後から振り返ると、やはり「答え」と「その理由」を書いていただいた後、「Ａさんの期待」と「その期待に応えるためには」を書いていただいた後と、２回、発表していただいて、さまざまな意見が出ているグループの発表も参考にしながら、次の問いかけをするような進行の方が、全体の話し合いを深めていただけるように思います。

発表の中で驚いたのは、「Ａさんがあなたを選んで告白した理由、Ａさんの期待」というところで「試したかったから」という意見が複数出たことです。後で自分で考えてみても「理由」と言われると「同和問題をどう考えているのかを知りたかったから」などという答え方になりそうな気がしました。「信頼しているあなたが、どう答えるか聞きたかったから。自分のことをどう思っているか知りたかったから」「試した（今後の二人の人間関係）」「“部落”に対するその友達の思いを試したかった」といった意見がありました。

各グループの発表の後は時間がなくなってしまい、結婚の際に相手に同和地区出身であることを告知したかどうかについての 2005 年大阪府「人権問題に関する府民意識調査」の結果を配布して駆け足で「個人間の問題としてとらえないでほしい」「社会に差別があることで、結婚相手や友人に自分のことを語れない場合がある」などといったお話を紹介したのですが、みなさんのご意見を聞きながらやり取りを深めるということがあまりできなかったのが心残りです。

やはりもう少し、導入の活動を短くし、かつ、「あなたならどう答える？」の活動に生かせるようなプログラムを検討する必要があると感じました。

なぜそのカードを選んだか／その理由	Ａさんの期待/思い	期待に応える言葉
１「知ってたよ」 相手に気を使わせないために軽く受け答えをする。 ２「そんなこと気にしなくていいよ」 部落出身という理由で友情が変わることはないので／直感的にそう思うから。でも重要なことと考えている相手の気持ちを尊重したい	信頼しているから、どう答えるか聞きたかった／自分のことをどう思っているか知りたかった／試した（今後の二人の関係がどうなるか）／一人で悩むのがしんどいし、同年齢の子に打ち明けて楽になりたかった／親友に隠し事をしたくはなかった。自分を知ってほしかった／同	これからも変わらないで。仲良くしよう。ずっと友達だよ／部落について、私も一緒に勉強していきたい／何かあったら言ってな／思い切って言ってくれてありがとう／Ａさんが部落に生まれてきたことは、Ａさんの責任ではない／結婚しよう！／私と一緒に差別をなくしてい

／言いにくそうに打ち明けてくれているのだから、本人はすごく気にしているはず／学生時代なら、何もわからずにこう答える。 **３「関係ないよ」** その後の付き合いでも何の変化もない／今までどおりでよいよ、という意味で。 **４「部落って何？」** 学生時代、同和教育を受けなかったので、当時を振り返るとこう答えると思う。 **５：言ってくれてありがとう** 自分を信頼して相談してくれたと思うから／悩んだ末に打ち明けてくれたのだろうと思うので **７：一緒に頑張ろう！** 今ならたぶんこう言えると思う。 **８：その他** 「あ、そうなんや」だから？と思う。あなたはあなたなんやから…／「そうなんですか」現実として受け止めようと思うから／「それがどうしたん？」関係ないと思っているから／「うん」話してくれたことを受け止める意味で／「何で話そうと思ったの？」住んでいる場所で友達になったのではないから	和問題について知ってほしい／同情（共感）を求めていた／私が同和問題について研修を受けていることを知っていたから／差別に対して、共に闘える（考える）友達として思っていたから／部落に対するその友達の思いを試したかったから。“力になってくれる人”と感じたから。「部落出身」と宣言することで、より強い絆をつくりたいと思ったから。一緒になって悩みの相談にのってほしいから／Ａさんが差別に立ち向かうための力になってほしい	きましょう／今後も差別にあったときも自分は真っ先に相談にのるよ／自分たちだけでなく悩みを共有できる人を増やしていこう。

「校区再編を考える」実践記録

教材開発の動機

実際に同和地区が含まれる校区との統合反対の際に、差別落書きが増えた経過について考えたいと思った。校区再編についての署名をすることが差別につながる可能性について気づかない人にどう働きかけるかといったことや、差別をなくしていくためにどうしたらいいかを考えたい。その後、自分ができることを考えたい。

テーマ：土地差別
タイトル：「学校区再編から学ぶ」
想定対象：企業研修（市民研修でも）
想定人数：２０～３０人（４～５人×５～６グループ）
所要時間：９０分
ねらい：土地差別が持っている構造的問題に対して、私は何ができるか

すすめ方：

１．４～５人のグループにわかれてもらう。
２．エピソードを読み上げ、話し合ってもらう。
３．差別をなくしていくために、署名をすることの問題に気づかない人に、どう働きかけるかを考える。

エピソード

同和地区が含まれるＡ小学校と、隣のＢ小学校が、生徒数が減ったため統合することになりました。するとＢ小学校区で反対署名運動がはじまりました。表向きは、通学が遠くなる、由緒ある校名がなくなるという理由でした。
あなたも署名を求められていますが、どうしますか。

Ｑ１　署名するとしたらどんな理由があるでしょう。
Ｑ２　署名することで、どんな問題が起こるでしょう？

●　Ｑ１について、話し合いで出された意見

子どもにとって遠くなる／規模が大きくなると、授業内容が心配／制服が変わるのがさみしい／教育方針に納得いかない。嫌／母校がなくなる／まわりが賛成しているから、一人しないと変わり者にみられる／自分が署名をしてもしなくても変わらない／自分には子どもがいないしどちらでも／近所づきあいで／みんなと同じ方が無難／村八分にされる

● **Ｑ２について、話し合いで出された意見**

Ａ地区内で署名をしない人は「なんで署名しないの？」と言われて立場が悪くなる／「あれだけＢの人が嫌がるということは、Ａになにか問題があるのでは？」といった憶測が飛び交う／「あんなにＡを毛嫌いするＢの人たちはひどいのでは？」と、逆のＢの人に対しても悪い憶測が飛び交う／Ａ小学校区内で「同和地区があるから、私らまで嫌がられる」と分断が起きる／Ａ地区とＢ地区の対立を生む

● **ふりかえり**

教材作成者から

教材を考えたときには、このテーマ設定で、もっと部落差別に関する意見が出るイメージを持っていたが、やってみると違っていた。そのため、当初考えていた「署名が人権侵害につながると気づかない人」にどう働きかけるかといったことや、差別をなくしていくためにどうしたらいいかを考えるための問いかけが噛み合わず、意見が出にくかった。そこで実践の途中で、「どんな問題が起こるか」を考えるステップを踏むことになった。この後、自分ができることを考えたかったけれど、時間がなかった／イメージしていたのと違って、むしろ“対立”を考える展開になった／取り上げるが難しい問題と思っていたが、思ったより問題提起できた。

全体から

「理由は何ですか？／問題はなんですか？」など、問いをうまくたてる工夫が必要／自分は校区再編で署名を求められた体験はないが、身近に考えられる／無関心のもつ危険性の再発見。無関心の中にある差別心に気づいた／署名する理由の言動にどう対応できるか？

・このあと具体的にどうできるか？／学校が動くことはとても大きい⇒抵抗感はなに？　地域の学校への思いいれ／大阪府民意識調査の分析で指摘されている「勢力観」にかかわっている／自分が「村八分になる」のを恐れて署名をした結果、相手の人たちを排除することになると気づいた。

● **改善に向けて**

Ｑ「なんとなく署名」をすることのなにが問題かを考える。

・自分の意志に反したことも、署名した数に含まれる。

・署名用紙に書かれた以外の理由に加担したことになる。⇒同和地区の人にとっては、署名したことが“同和地区の人とはいっしょになりたくない”という意識の数に見える。⇒住民の対立を生む。

・状況を少しずつ展開させていく流れにしては？　１）知らずに署名　⇒２）ちょっと情報を聞く⇒３）なんかヤバイぞ　どう結果が変わるのか？

⇒これら意見を受けて、ファシリテーターの栗本敦子さんがワークシートを４枚に改訂。一般市民対象講座（2007 年 7 月）で実践。

人権啓発促進役経験交流会の実践記録（開催日：2007 年 9 月 29 日）

タイトル：「校区再編を考える」改訂版

実践：中山久夫さん（クラシエホールディングス㈱）

時間：午後１：08～1：40　＊他のワーク後に実践したので、アイスブレーキング等はなし。

参加者：１７名

グループごとに記録をとる人を決めてから話しあい。１枚ずつカードを出して３分程度話し合ってもらい、その都度、グループごとに発表（１分）。カードは全部で４枚。

１）あなたが住んでいる地域は、Ａ小学校の校区です。
市内の子どもの数が減ってきていることをうけ、隣のＢ小学校と校区をひとつにする計画がある、と市の広報誌で読みました。
それに対し、最近、市民の中に校区統合反対の動きがでてきている、という話をききました。
Ｑ．校区統合に反対している人たちは、なぜ反対しているのでしょう？

自分の学校がなくなるとさびしい。それぞれの伝統を大事にしたい／通学距離が遠くなる／もうひとつの学校の評判が悪い（荒れている、同和問題、在日がいる、うるさい親が多い）／校舎が古い／ＰＴＡがイマイチ／小規模校の方が教育がいい／知らない人と同じになることへの不安／対等合併でないと小さい学校の方が肩身が狭くなるのでは／わからない／周囲の環境／公営住宅入居者が多い／一般校と同和教育推進校の統合では、同推校にされてしまう／レベルが低い。学力が低く人権教育が熱心（＝教科教育がおろそかになっている）

２）校区統合に反対している人たちは、署名活動をはじめました。
あなた自身は、賛成・反対ということにとくに考えはないのですが、ある日、近所の知り合いがやってきました。反対署名に協力してくれないかというのです。きくと、住民の多くが署名しているといいます。
あなたも署名することにしました。
Ｑ．なぜ、署名することにしたのでしょう？

頼まれた／人間関係を壊したくない／自分の中に賛成の気持ち／頼んだ人を信用していた／自分は子どもがいないし、関係ない／ＮＯといえない性格／自分は内容を読まずにハンコを押してしまうようなタイプ／つきあい／自分自身に意見がない。意思がない。／「署名しなかった」といううわさが広がるのがイヤ／世間体／違うことをすると周りからいろいろ言われそう／「困ってはるねんな」という共感／少数派になると説明を求められる

３）後日、近所の人と世間話をしていると、校区統合の反対署名のことが話題にのぼりました。なかの一人が「Ｂ小学校の校区には同和地区があるからねぇ」と言いました。署名用紙の反対理由には、そのことは何も書かれていませんでした。
Ｑ．この発言をあなたはどう思いますか？　また、その場でどう受け答えしますか？

困った。知ってたら署名しなかったのに。なんで理由に書いてなかったんやろ。書類しっかり読まな

アカンな／「あなたはそれを知って署名したん？」と相手に聞く／やっぱりそうやったんか／（署名用紙に）そんなん書いてなかったのに…／書かれへんようなまずいことなんや／書かれへんわな。だまし討ちやな／「署名したっていうことは差別したということですよね」と相手にいってシーンとなる／「そんなことやったら署名しなかったわ」といって自分が差別したということを回避したい／自分を責めてしまう／「頼まれただけや」と自分を肯定しようとする／同和地区どうこうは関係ないやろう

４）署名はたくさん集まり、市に提出されましたが、市の校区統合の方針は変わらないようです。ある日バスに乗っていると、親子づれが前の席に座りました。子どもはＢ小学校に通っているようです。やりとりの中で、子どもが「ウチの学校、みんなに嫌われてるんかなぁ」というのがきこえてきました

Ｑ．Ｂ小学校（の校区）ではどのようなことがおこっているでしょうか？

なんでうちの学校がそんなふうに言われなアカンねん／こっちこそ統合願い下げや／Ｂ校区の人が自分たちの校区が責められる理由を探して「あそこ（同和地区）の子らがやんちゃばっかりするから／やっぱりあそこの地区があるから」と、この校区内の地区以外の人の意識が悪化するのでは。／怒り、へこむ／Ｂ校区の一般地区の人たちから「やっぱりな／うちらもイヤやねん／私らもＡ校に行きたい」というネガティブ面が出る可能性と、「なに言うてるねん」とポジティブな意見が出る可能性も。Ｂ校区内での同和教育についての取り組み次第では／子どもたちの心が傷つく／先生や親にも「なんで私らの校区は嫌われてるの？」ということをきく子が増えているのでは／「自分たちがもっとしっかりすれば嫌われない」と親が子どもに言ったり／学校全体があれている子どもたちに手をかけようとしたりするかも。

●　教材の評価

よかったこと

・４つのカードになっていて「次どうなるんやろう」という面白さがあった。
・４段階目のＱが「Ｂ小学校区ではどのようなことが起こっているでしょうか？」と、被害者の側の気持ちを想像することができた（建前、正解ではなく）。
・被害者がさらに被害者を作るような現実を感じる。
・世の中の多くの人を代表している。あまり考えなく差別する側にまわってしまっていることへの気づき。
・自分が無意識でやっていることが差別につながるということ。

疑問

・前向きに現状を打開する方法を考えたい。
・「みんな」はクセモノ。誰が主体？
・１⇒２⇒３⇒４の展開で、自分がどこに立って考えるのか、めまぐるしく感じた。
・実際こういう場合、「署名する」と思う人がこのワークに参加していたら、最後の段階でどう感じられるのか知りたい。

アイデア

・あなたはどう行動していくのか、に焦点化すれば面白いかな。「考えないではすまされない」から

どうするか。

・最後にもう一度１，２，３，４に戻って、どの時点でどういう対応ができたかを（署名をしないだけでなく、もっと積極的に）考えるといいのでは。

・２段階目は「署名することにしました」とする必要はないかも。後の展開で「自分が差別したことにされた」という不満が残るように思う。署名してなくてもこれを見過ごすことも問題だから、この設定は「どうしますか？」でいいのでは。

⇒これらの意見を反映して、シート２の「Q」は「あなたは署名しますか？　するとしたらどうしてでしょう？」と変更

● **ふりかえり**

・「自分の学校の伝統を守りたいだけなのに、差別者扱いされた」ということで対立が激化するといったことになりかねない。その人の「母校を大事にしたい」という気持ちは大事にしつつ、「でも、なぜそこまで拒絶するの？」というところに切り込んでいくことが必要。
自分は無意識にやっていることが、人権課題や差別につながっていくということについて、ちょっとでもはっとしてもらえるだけでも十分かもしれません。

● **課題**

・土地差別問題からはねらいが遠くなったように思う。

・「はめられた感」があることの可否について話し合い。しかし、現実でも「はめられた」ということはあるわけだから、このままでもいいのでは。

第２２回人権啓発研究集会の実践記録（開催日：2008 年 2 月 14 日）

タイトル：「校区再編を考える」再改訂版
実践：中山久夫さん（クラシエホールディングス㈱）
時間：10：05～11：50
参加者：４４名

すでに一度、「経験交流会」で実践していただいた中山さんに、再度、自社の研修でこの教材をつかう場合を想定して実施していただきました。また実践後、午後のワークをお願いしている西田真哉さん（トヨタ白川郷自然学校校長）から教材の評価をいただきました。
詳細については、『解放新聞 愛知版』の記事をもとに報告します。

参加者はあらかじめ入り口で番号のついたお菓子をもらい、その番号のテーブルに座ることになっている。この日は６テーブル、７～8 人のグループに分かれた。

中山久夫さん（以下、中山）：この場は啓発の場なので「差別的な発言かな？」と思われても、思い切って言ってみてください。発言したことについて認識を改める場でもあるので、一方的に話を聞くのではなくお互いに意見を交換することが大切だと思います。但しここで得た情報は許可なく外には出さない、秘密は守る。この二つはお願いします。それから付箋紙に名前・ニックネームを書いて相手

に見えるようにしてください。これからアイスブレーキングを兼ねて一人約１分、自分自身のことを含めて「最近こんなことがあった」とそれぞれ発表して、簡単な自己紹介をしてほしいと思います。

〈グループごとに自己紹介〉（約 10 分）

〈アイスブレーキングを終了、中山さんが自社の人権問題の取り組みを紹介〉

中山：今日皆さんに取り組んでいただくのは「校区再編問題」です。エピソードを①から④、4 枚のカードに分けているので、順番に配ります。グループで話し合って、最後にまとめて発表していただきます。

〈エピソード①～④を読み上げ、それぞれについて約５分話し合う〉

中山:なかなか当事者の立場に立って考えることは難しいと思いますが、このワークの改善点も含めて考えていただきたいと思います。最後にまとめて模造紙に書いていただき発表していただきます。また、全体を振り返って、この段階でこういうことができたのではないか？という対応策についても話し合ってください。

〈約５分話し合う〉〈グループごとに代表が、模造紙にまとめられた討議内容を発表〉

①のＱ「校区統合に反対している人たちは、なぜ反対しているのでしょう？」に対しての意見

保護者からみると子どもたちの通学が遠くなって不便になる。安全安心が保障されない／母校がなくなると、地域がさびれていく等デメリットが心配／相手の学校にどんな人がいるのかお互いに分からんから不安があるなあ／相手の学校にいじめがあったらどうしようか。学力の格差があったら合わせないといかんのか／地域の高齢者は地域の文化や地域性が失われると心配では

――なお、この段階ですでに「市民から反対の声がでてきた理由はＢ小学校に被差別部落があるのではないか」と予想しての意見もあり、「同じ校区になると自分たちも被差別地区の人たちと同じように見なされてしまうかもしれない。市民が見なされることを嫌がって同じ校区を避けたがる地域としては、他に在日コリアンの部落があるのではないか。精神障害者施設が通学途中にあって嫌だ、子どもが心配だという偏見に満ちた思いがあるのではないか」など発表があった。

②のＱ「あなたは署名しますか？するとしたらどうしてでしょう？」に対しての意見

人間関係の中では中々断りにくいし断る理由を説明するのが難しい／片方の意見で署名活動しているのはおかしい／理由が分からないので悩んでしまう／うやむやにして逃げる／所詮統合される。近所付き合いの関係がまずくなることを考えて署名する／統廃合に反対であっても理由が納得できなかったらしない／近所付き合いもあるし、恩義がある人から言われたら嫌と言えないのが普通。あとの人間関係が心配／署名するにあたっては双方の意見を聞いて自治会とか自治連合会で両方の意見を闘わしてから、自分で判断して決めるのが筋／署名しに来た人は確信犯で本質は裏に隠されている／署名という手法自体が嫌いなので署名しない／はぐらかして署名をことわる

③のＱ「この発言をあなたはどう思いますか？
また、その場でどう受け答えしますか？」に対しての意見

反対する署名をしていたら撤回したい／地域・校区全体での話し合いをする／被差別部落を反対理由にしていることは問題があるという意見を表明する／差別発言が出てきたときに聞き流せないし、受け入れられるものではないが面と向かって話すのはしんどい／やっぱりか。核心はここにあったのか。『そうやな』と肯定的に応じてから、『確かに同和地区がある。でもどうしてそういうこと言うの。だからどうしたの』と聞いてから、『あなたはそう思うかもしれないけれど私はそんな風に思わない』という反対の意見をはっきり伝えないと、うやむやにすると差別が助長される／これは核心の発言だ。相手によるかな。親しい人であればあるほど、その発言の真意をとって差別発言だよとしっかり伝える／せめて同調しない／先手必勝。発言が出てきたら、『そこは同和地区があるからね』と言われたらすぐに『じゃけん反対するのはおかしいよね』という風に先に言ってしまうやり方もある／複数いて別の人が『そうだよね』という話になったとき、同調しないとか、反対するのは難しい

――また「このことが新しい差別を生み出していく。知らない人が部落へのマイナスイメージを知っていく。そのとき『あんたそれはおかしかろうが』と正義感を持って拳を振り上げても浮いてしまったり、受け入れられなかったりということが大いにある。いかにソフトに返すか。一人の理解者を得る、相手の考え方に変革をもたらすことがどれだけ難しいか」といった感想もあった。

④のＱ「B 小学校（の校区）ではどのようなことがおこっているのでしょうか？」に対しての意見

「B 小学校の被差別地域の子どもの思いは？」というところが結論が出ない／B 小学校区の被差別部落の親御さんは自分たちの存在が合併のネックになっていることが表面化しているわけですから、B 小学校区の親御さんにはなんの責任もないのにいたたまれない気持ちです。そこを素通りできない問題としてどう考えるか結論がでませんでした／B 小学校の中で地区の人に向かって、地区外の親が『あの人たちがいるから私らまで反対される』という意見が出てくるとまずい。B 小学校がまとまって A 対Ｂのかたちになる方がまだ救われる／B の中で弱いものたたきになるとまずい／地区の人たちからすると、外から統合の話が出て反対されるというのは本当に無力感を感じるだろう／つらいなあ／校区の中に同和地区があるので、同和地区と地区外の地区があるはず。地区外の人が『あの人たちと一緒やから私らまで差別視される。私らだけで A 小学校と一緒になる』という話しも出てくるのではないか／展望が持てんことが頭をよぎって、わしら嫌われてるんかということがあまりにも悲しくて、やがて『なんで嫌われとるんだ。部落があるけんか。部落があったらそんなにいけんのか。誰が部落か。お前が部落か』と進んでいったら当事者は非常にしんどい思いをして展望が持てなくなる。

そして、**「各段階でなにができたか」**話し合った結果として

反対の声が出てきたときになぜ反対かを考えることが大事／やはり２番の段階で気がついた人が人権学習をして、行政や人権団体が、その署名はおかしかろうと待ったをかける責任を果たさないといけない／３番でこれは学習するチャンスと受け止めて学習機会に変えていく／反対の理由に被差別部落が出たときに、町民大会、地区の大会を開いて被差別部落の存在を理由に合併反対は間違いだという共通認識にしておくべき／二つの小学校はどうせ同じ中学に行くのだから、広い地域で情報交換して手を結んで地域の平和や人権を守るという活動を広げていかんと話にならない／B 小学校は自分たちの誇りうるところをもっと表面化させ合併を対等に進める条件作りをする。学校に対する愛着心、子どもの自尊感情、自分の学校のアイデンティティを育てたい／B 地区がまとまって統合反対運動に対する反対運動を盛り上げていってほしい／市全体の取り組みとして差別をなくしていこうという盛り上がりがあれば、学習会とかして地域の同意が得られるのではないか

発表の後に中山さんから、奥田均さんの『土地差別』をもとにした資料の配布と説明があり、「同じ校区」でさえも差別の対象になる現実が報告され、ワークショップは終わった。

また教材に対する意見としては、「この設定については、中々核心に迫る話し合いにならない可能性もあるなという意見も出た。③の同和地区があるという話が出てきたときそれはそうだという発言が出てきたときにそっちに流れていくこともあるのではないか」という発表があった。

●　西田真哉さんよりの教材の評価

一枚ずつのシートで、あまり詳しく状況設定をせずに、曖昧な設定にしてあるところにこの教材の特徴がある。曖昧にしていることで、参加者が自由に解釈をして意見を出せるところが良い。

学校の統廃合については、本当にいろいろな意見があり、複雑な問題である。だからこそ、様々な意見が出る。表面的に見えていることから出ていた意見が、徐々に条件が明らかにされていく。

ただ４枚目のシートについては、「Q.」をもっとシンプルにした方が参加者が混乱せずにすむだろう。「あなたはどう思いますか？」だけで十分だと思う。

●　ファシリテーターの感想

昨年ゼミナールコースとして開催された、同和問題を考える参加型教材づくりのテーマを「不動産物件の貸借」に係わった経験から、メンバーと企業の立場で部落差別の解消を考えました。

小規模な業者の多い不動産取引の現場では、お客様に「それは部落差別ですよ」と伝えることはまず考えられないし、社会において安易に部落差別が飛び交っている現状から、決して部落差別は解決に向っていないことを、常々ジレンマとして感じていました。

分科会が始まる前に、事務局の栗本さん井村さんと計画を組み立てるなかで、もし意見が出なかったら、静かな展開になったときはどうしようとか、最後にどのように解説を入れて理解を深めようか迷いましたので、事前に『土地差別　部落問題を考える』の著者である近畿大学教授の奥田均先生から助言と著作物使用の承認を頂き、簡単なプレゼンを作って大きな期待と少しの不安をもって当日望みました。

自己と自社の紹介後、４枚のカードを順次読み上げて配付しましたが、冒頭からヒートアップした議論が展開されたのには少し驚きました。

今回、各地から学校教育、市民啓発、企業その他の方面で、部落差別に向きあって熱き想いで活動されている方々が参加されるとは予想していましたが、一人ひとりが部落差別の壁に立ち向かう大きなエネルギーを感じると共に、率直な身近な題材をもとに分科会で同じ想いを共有する仲間として、さわやかな連帯感を感じることができました。

今回の分科会促進役としては意見を聞くことだけで終わってしまいましたが、通常社内の研修などでは、このような展開はまず考えられませんので、補助教材として解説用のプレゼンなどが必要と考え用意してみました。今回の報告書に掲載していただいていますので、また教材としてご活用ください。

おわりにつたない進行でしたが、参加されたみなさんから生の声を伺うことで、力強いエールを頂き元気と勇気を頂くことができてちょっと感動しました。ありがとうございました。

●　参加者からの提案

人権教育研修担当者として、はじめてワークショップに参加しましたが有意義な経験ができただけでなく、今後、人権教育研修を進める上で大変参考になりました。

今回、体験した内容は、参加体験型演習として少人数で活動するのに適すると思いますが、初任者研修や教職経験者研修（１０年目研修）といった大多数の受講者を対象にした場合でも十分に活用できるのではないかと感じました。講堂で行う場合でも、演習問題をスクリーンに提示し、近くに座っている者同士（４人程度）でグループを組み、論議をすれば十分研修効果が上がると感じました。

また、各学校現場に出向いて行う研修では、そのまま活用できますが、以下の点を改善すると教員研修や行政職研修にさらに役立つのではないかと思います。

あくまでも、個人的な試案ですが、今後の参考にしていただければ幸いです。

（１）　ワークで感じた感想

設問１：校区再編問題の表面化　人権教育にかかわるワークということで参加者から「統合反対の裏には、B学区には同和地区がある」との決めつけが見られ、はじめから同和地区があることを前提に話し合われていた。人権教育を取り扱うワークであるからこそ、こうしたステレオタイプの考え方にならないようにする工夫が必要ではないかと考える。

設問３：B学区内にある同和地区の存在の露呈

人権教育を考えるワークとするなら、同和地区以外でも十分論議できる。同和地区だけをテーマとして出すより、外国籍住民に対する差別意識なども台詞に盛り込んで、他の問題に着目してもらってから、さらに同和地区の問題もあることに気付かせるように段階を追って、論議を深めさせることもできるのではないか。

（２）　改善私案

今回の内容を深めるために次のような内容を加えるとよいのではないかと思います。

＜学校関係者を対象にした場合＞

追加案	ねらい
設問５：あなたはA小学校の教員です。 学級の子どもから「B小学校とは一緒になりたくないって、家族の人が言ってたよ」といった発言を聞きました。あなたは、こうした子どもたちに、どのように働きかけていきますか？ まず最初にしようと思うことをできるだけ具体的に考えてください。	家族や地域住民からB小学校の子どもを差別するような意識をすり込まれているA小学校の子どもたちに、人権意識を育てるために、どんな指導を行っていくか、具体的な活動事例を基に考えることができるようにする。
質問６：あなたはB小学校の教員です。 学級の子どもたちから「先生、ぼくたちってA小学校の地域の人たちから嫌われているみたい？」と言われました。あなたは、学級の子どもたちに、どのように働きかけていきますか？ まず最初にしようと思うことをできるだけ具体的に考えてください。	差別意識にさらされているB小学校の子どもたちに対して、自尊感情を育て、たくましく生きる力を育てるために、どのような指導を行っていくか、具体的な活動事例を基に考えることができるようにする。
質問７：こうした問題が起こる前に、日ごろから教師として、子どもたちにどのような教育をしていきたいと思いますか。	人権教育として、心がけておくべきことをまとめてもらい、日ごろから指導すべきことを具体的に考え、実践できるようにする。 ※　いずれの問題も質問３（２）の同和地区についての問題や、それに続く、質問４のB小学校で起こっている問題を取り上げなくても可能であると考える。

＜行政関係者を対象にした場合＞

追加案	ねらい
設問５：あなたはA地区の住民にどのような働き掛けをしますか。 質問６：あなたはB地区の住民にどのような働き掛けをしますか。 質問７：こうした問題が起こる前に、日ごろから行政職員としてどのようなことを心がけたいと思いますか。	行政職員として、地域住民に対してどのように働きかけていけばよいかを考えることができるようにする。

「“うわさ”に返す言葉」実践記録

教材開発の動機

差別発言を再現すること自体が苦しかったが、あえて取り上げようとした。もし当事者が参加するとすれば「なんでこんな話し合いせなアカンねん」と感じるのではないかと思いつつ。さまざまな「気になる発言」を取り上げるか、同和問題に絞り込むか悩んだが、同和問題のみにした。当初、教材を作り始めたときには、個人でシートなどをみて考えて、グループで話し合うという流れを想定していたが、“文字にして残す”ということへの抵抗感があって、ロールプレイでやることにした。

テーマ：差別発言
タイトル：「差別発言に出会ったとき、あなたは…。」
対象：人権啓発リーダー研修（３日目）
人数：２０人
所要時間：４０分
ねらい：同和問題に関わる差別発言に出会ったときに、自分が何ができるのか。その関わり方を考える。

すすめ方：

1．素材１をファシリテーターがロールプレイで演じる。それを直接、聞いた人、または近くでそれを見聞きした自分を想定して、どうするか考える。（指摘するとすればどうするか考える。）

問いかけ：あの人はどうしてああいうことをしたのでしょう？　どういう意味だったのでしょう？　指を４本出すしぐさは、同和地区の人々を侮蔑する許し難い差別表現です。今のロールプレイのような状況を見かけたとき、あなたはどうしますか？　今後もその相手とはコミュニケーションをとりたいと考えています。

2．２人１組になって、それぞれの関わり方を共有する。
3．全体で具体的な関わり方や出てきた課題を出す。
4．素材２をファシリテーターがロールプレイで演じる。以降、素材１と同様に共有する。
5．「差別用語」を使わないことが大切なのではなく、その言葉が使われたとき（行為が行われたとき）にみすごしてしまうことの問題に気づき、関わりを考えていくことを方向性として確かめる。
6．全体で出し合った関わり方(差別を指摘する）を最後にロールプレイしてみる（成功例)。
言い返す／介入するロールプレイまでやって共有する。

素材１　　同和地区の「人」への指を４本示す差別表現（差別行為）

友達に手招きされる。 友達「あいつこれ（第三者をさして指を４本示す）らしいで」 あなた「　　」

素材２　　同和地区の「場所」への差別発言

父と息子の会話。
息子「お父さん、部落で事故を起こしたらこわいねんてな」
父（あなた）「　　」

● **素材１について、話し合いで出された意見**

どういう意味？（行為の意味が理解できない）／何してるねん。おかしいやないか／どういう意味でやってるの？／今のはなに？／なんでそんなことするの？／（電車の中など聞こえにくいときには）放っておく／嫌われてもいい相手なら言う／自分との関係によって、対話調か詰問調か、話し方が変わる。

● **素材２について、話し合いで出された意見**

誰から聞いた／他にどんなこと聞いた／あなたそれを聞いてどう思う／一緒に行ってみようか／どこで事故しても相手が怒るの当たり前やろ／同和地区に限った問題じゃないで／どんな風にこわいと聞いたん？／そういうことを聞くのは不愉快や／いまどきそんなん言う人おるんや（鼻で笑う）／うわさみたいにそういうこと言うのって、どうやねん？

● **ふりかえり**

教材作成者から

やること自体が苦しかったが、取り上げてみたいと思った。／いろんな「気になる発言」か、同和問題に絞り込むか悩んだ／２つめの事例は実話／関係性によってどの言い方もある／当初、教材をつくっていたときには、個人⇒グループの流れで考えていたが、“文字にして残す”ということへの抵抗感があって、ロールプレイでやることにした。

全体から

ロールプレイは緊張感があって考えやすい／ロールプレイの後で拍手をすることで気持ちを切り替えられた／逆にこの内容で拍手することに違和感があった／差別発言（や行為）を演じることのキツさ、抵抗感を感じた／言い返す―介入するロールプレイまでやって共有するのが良い／「差別発言はダメですね」で終わらないためのやり方がシンプルにできた／場の安全を守るという点で「（差別発言を言うなんて）できなかった」という当事者がいたときには？⇒グループでシェアする／実際によくあるケースだけに、単に言い返すだけでなく、説得していくロールプレイをやってみたい。もうちょっとコミュニケーションをとりながら／タテマエで終わる可能性。差別的な反応があった場合、どうするか／ロールプレイをしても、指を４本出すしぐさの意味がわからないといった参加者にどう説明するのか。「そんな差別的な言い方があるのですか」という反応が出るときに、どう教材化するのか。

● **改善に向けて**

そもそもロールプレイの意味がわからないという参加者がいた場合に「どう返しますか？」という

問いかけで話し合いが成り立つか？／「人権啓発リーダー研修（３日目）」という設定だったが、なぜ対象が限定されるのか？　知識のない人にこそ考えてほしいのでは？⇒この教材でなにを目的にするのか？

Q　教材の目的をはっきりさせるには

実際にそういう場面に出会ったときのトレーニングとしてロールプレイ？／関係性によって言い方、対応が違うということを考えることを目的にすることもできる（身近な人には嫌われたくないという意識が働いたり、逆に身近なだけに率直に言うということも）。なんのためにどんな言葉を返すのか？　その中で自分の気持ちも出てくる／横軸：問題は曖昧なまま⇔問題を明確に指摘する縦軸：人間関係良好⇔人間関係悪い　の四象限で、問題を明確にしつつ、関係性も○という働きかけをどう考えるか／上司－部下、お客さん相手などでどう指摘するのか、受け答えするのかは、必ず企業研修で取り上げるべき設定。企業研修としては、次のことを考えるよりも一歩手前の「最低限、ここまでは言っておく」ということを研修で全ての職員にいわなければいけない／どの対応もありえる。が、当事者はそれで納得するか？⇒対応を考えることから、どう同和問題を考えることにつなげるのか？／当事者でない人が「差別発言のロールプレイなんてしたくない」と思う感覚はなんなのか。当事者は嫌でも経験しているのに。あまりにも「差別について軽々しく語れない」という感覚が強いことで、妨げているものがあるのでは。大事なことであり、考えていきたいことであるはず。どういう覚悟でこうした問題を話し合うのか。継続して考えていきたい。

⇒こうした意見を受けて、栗本敦子さんと事務局で検討。ゼミの教材は、露骨な差別発言で考えた結果、意見を出しにくかったので、差別発言ではないが聞き流せない噂話の事例と対比して考えるように改訂。なまじ学んでいると、マニュアルどおりの「模範解答」を言いがちだが、それでは生身の人間関係で差別発言に出会ったときに、対応しがたい。「自分はなぜ、この言葉（部落差別発言）に対して答えにくいのか？」ということを考えるための教材にしようとした。

人権啓発促進役経験交流会の実践記録（開催日：2007 年 9 月 29 日）

タイトル：「差別発言について考える」改訂版

実践：田中千恵さん（三重県教育委員会）、田中弓子さん（名張市小学校教員）

時間：６０分

参加者：１７名

すすめ方：

1．事例１の状況を説明し、ファシリテーターがロールプレイをする・
2．自分がＢさんならどう対応するかを考え、グループで話し合う。
3．考えた言葉をもとに“解決編”のロールプレイをやってみる（いくつか）。
4．同じ要領で、事例２についてもやってみる。
5．２つの事例をやってみて気づいたことを話しあう。どちらが対応しやすかったか？　それはなぜか。
6．差別発言に対応するときの課題と手立てを話しあい、共有する。

事例１

状況：登場人物はＡさん、Ｂさん（あなた）です。二人は友人同士です。
　共通の知人であるＣさんについて。あなたはＣさんをとても信頼しています。
Ａ：知ってる？　こないだＣさんのことでちょっと聞いてんけど…。
Ｂ：なに？
Ａ：Ｃさん、実は結構平気でウソついたりしてるみたい。あんたも騙されてるかもしれへんし、
　あんまり信用して付き合わんほうがえぇで。
Ｂ：「　　」

事例２

状況：登場人物はＡさん、Ｂさん（あなた）です。二人は友人同士です。
Ａ：なぁ、知ってる？
Ｂ：なになに？
Ａ：部落で事故起こしたら恐いねんてな。あんたも営業であちこちまわってるみたいやし、気
　をつけた方がえぇで。
Ｂ：「　　」

●　話し合いで出された意見

事例１

その話は聞きたくない／なんでそんなん言うの？（１：出来事を聞いている、２：それをなんのために私に聞かせてるの？）／ふ～ん（１：さらっと。２：顔の表情で同意しかねる、という意思を出す）／誰がそんなん言うてるの？／私はＣさんを信用してるから関係ないわ／そんなことないよ／そんなふうに言うの誰に頼まれたん？

事例２

何時何分何秒、いつどこで誰がそんなこと言ってたん？／この１回で会話が終わるような返しでない返し方を考えたい。「どこでも事故には気をつけてるから」では話しが終わってしまう／そういう話よく聞くけど、それってなんでかなぁ／ふーん（この人、なに言ってるねんという否定的なニュアンスで）

●　ふりかえり

Ｑ　どちらの方が対応しやすかったか、それはなぜか。

最初の事例は言いやすかった。友達は信頼しているという感覚があるのでストレートに言える。事例２は社会的なことなので、とっさの価値判断ができにくい、ぶれる。「こうあるべきか」「どう答える

のが正しいか」などと考えてしまい、それをとっさに言葉に出すのが難しい気がした。「ありがとう、気をつけるわ」といってしまってから「あれ？」と思い後日「あれおかしいんちゃうん？」などというなど、ズレがあるように思う。／事例１は「ふーん」と答えた。「お前の言うことなんて信用せぇへんわ」という意味で。事例２は「お前、間違ってるぞ」ということを会話の中に入れると思う／事例２の方が話しやすかった。自分が人権文化センターに勤めているので、自分がどこでも気をつけるのは一緒なので実際の話として答えやすい。事例１はあまり自分で経験がなかったので考えやすかった／事例１の場合は直接利害があるというか、近い話なので「こう答えたらどう思われるかな」などと考えて難しかった。自分の中で同和問題は人事としての役割意識が強いのか、かえって話しやすい／すごく違いがある。事例２は「同和問題のことわかってほしい」と思うから関係を切らずに考えないと、と思う。事例１は、Ａさんに対する不信感が生まれて「Ａさんって私にとってどういう人なのだろう」などと考えてしまうと思う。

●　教材の評価

よかったこと

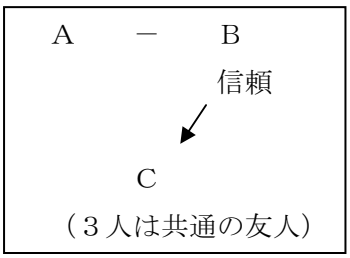
面白かった／返す言葉を考えていくのにロールプレイがシンプルでわかりやすかった／友達関係から同和問題へと、２つロールプレイがあって、ロールプレイに慣れて考えられるのでよかった／事例１だと人間関係だけだったが、事例２で自分は同和問題についてどう考えているのかを問われていると感じた／ロールプレイがシンプルだったので、話し合いに広がりがあってよかった／差別発言について、なんども言い返すロールプレイをみると、安心感を感じられた。

疑問

事例１と２のつながりが自分の中で整理できていない／タイトル「差別発言」だが、事例１は差別発言か…？混乱した／誰を対象にやるか？／ふだん問題への意識がない人だとどうなるか？

アイデア

解決編のロールプレイは、グループ毎で考えて仕上げてもらってはどうか。一言だけ考えるのではなくその後の展開も含めて、すっきりするまで／ファシリテーターが出てきたアイデアすべてをやるのは大変だと思うのだが。⇒しかし、差別的発言をするような役割は、参加者にはさせない。
図を描いてロールプレイの人間関係を説明した方がわかりやすい。



「なんで同和問題は語りにくいのか」という切り口で考える。⇒対比させて考える／シナリオはシートにして配布した方がいい？（少なくともグループに１枚）／タイトルから「差別発言」をはずす

●　課題

５と６の問いについてのすすめ方の整理が必要。

「不安のもとは？」実践記録

教材開発の動機

結婚差別について考えるときに「利害があれば利につく（差別されない方を選択する）のは仕方ない」という論理に陥ってしまうと、それに反論するのも「それは間違っている」と説教をするような流れになってしまうのではないか？という話になり、そこに陥らないために「不安」を考えるとした。

差別があることを知っているから忌避意識が生まれる。「自分ではどうにもできない」と感じるからこそ、避ける。それが差別につながるとは思っていない。そんな状況で「個人で避ける人が悪い」という話し合いをしても…。そもそも個人で解決できるのか？　忌避意識を和らげるためには、「一人ひとりが避けないようにしましょう」でいいのか？

差別の社会的構造に視点を向けられる教材にしたいと思った。

テーマ：忌避意識／結婚差別
タイトル：不安のもとは？
対象：一般市民
時間：４０分
人数：何人でも
ねらい：部落差別が現存する社会の中で、直接的な差別行為がなくても不安が生まれることを理解する。
その不安が忌避意識や差別につながることを考える。
手法：ブレーンストーミングからグループ討議
素材：エピソード
すすめ方：

１．４～５人のグループに１枚、エピソードのシートを配る。
２．「なぜ不安なのでしょうか？」
３．「彼女が安心できるためには、どうすればいいでしょうか？」
「あなた／みんな」と「すぐにできる／長期的に」の４領域で考える。
４．2005 年大阪府民意識調査結果をもとに、社会動向の認識が忌避意識形成に強く作用していることを解説する。

エピソード

> つきあっている彼から「実は部落出身。結婚したら一緒に部落に住んでほしい」と言われました。それ以降、本を読んだりして同和問題について勉強し、いろんな差別があることがわかってきましたが、わかるにつれ、将来、子どもが生まれたら、本に書いてあったような差別を受けるのかもしれないと思い、不安です。

● **話し合いで出された意見**

Ｑ　なぜ不安なのでしょうか？

世の中に差別があるから／当事者でなかったのに当事者になるから／差別されることに慣れていないから／立ち向かった経験がない／家族に対する影響／本で勉強していて、実際を知らないから／子どもには代わってやれない／子どもの心配と言っているが実は自分の不安。自覚がない、思い至っていない／部落のことをマイナスにとっている／差別があると知ったが、その解消方法について知らない。

Ｑ　彼女が安心できるためには、どうすればいいでしょうか？

	（あなた）ひとりから	社会みんなで
すぐに	彼に不安だということを話す／彼の実家に行く／実際に彼の地元に行って人間関係をつくる／学習する。差別解消の取り組みについてもっと知る／今までの人間関係の中で理解を得る／家族を仲間に。理解者に（もしかすると家族も差別にあうかもしれないので）	啓発・差別解消の取り組みをすすめる／厳しさではなく、解消の方法を伝える／運動に巻き込む
長期的に	仲間をつくる／似たような経験をした人の話を聞く／同和地区の子どもの話をきく／公園デビューして地区での関係をつくる／子育ての仲間をつくる／子ども会、学校開放、ＰＴＡへの参加	学校教育で同和問題について伝える／交流をする。豊かさを伝える。（イメージが変わる）／子育てのネットワークづくり

● **ふりかえり**

教材作成者から

思っていたよりたくさん意見が出た／不安を乗り越える手立てがたくさん出たのでよかった／なにをもってきたら忌避意識に迫れるのか悩んだが、最後に勢力観についてのコメントをしたことで少しわかってもらえたかなと思う／「不安の原因」という問いの立て方が適切かどうか悩んだので、なにかアイデアがあればほしい／「あなた」という設定が、エピソードの中の主人公にするか、主人公から相談を受けた「あなた」にするのかによっても変わると思って悩んだ。

全体から

ぼんやりしていた「不安」がちょっとはっきりした／「すぐに―長期」「一人で―みんなで」という軸が考えやすい。その軸の中で「ネットワークをつくる」などをどこに書くかもいろいろだと思った／問いが素直に入ってきた。こうした不安を持っている人の話はよく聞く。今までの出会いを思い浮かべながら考えられた／エピソードを読み⇒不安の原因を考え⇒解決の手立てを考える、という流れが安心して参加できた／「できること」を考えることで、限界も感じてしまうかも。無力感／差別する構造の一部である自分⇒原罪意識ではなく、社会の構成員の一人である自分だからこそできる！！という意識になるようにできたら／差別は、同和地区に対する見下し意識や偏見が原因、悪意のある人によってされると思われがちだが、このケースだと「避ける」こと自体が問題につながるということは考えやすいのでは／企業の管理職研修などで、「上司として部下に相談されたらどこまで関わる？」ということを不安に感じている。相談されても背負いきれないという不安。「その相談に関わ

らないこと自体が差別を助長する」と迫られると、どこまで関わることができるのか、アドバイスできるのか。相談にのっていて、最後に「やっぱり私は結婚できない」という結論を相手が出したとしたら、説得できなかった者は非常に責任を感じる。

● 改善に向けて

「あなた」「みんな（社会）」の間に「親しい誰かと」「身近な誰かと」などと入れれば、もうちょっと違うアイデアが出てきたかな？と思う。間が飛びすぎな感じ／「つきあっている彼」は「彼女」でもできる／「不安」と「忌避意識」の関係をもっと整理したい／「避ける個人が悪い」という結論ではなく、差別を支える社会構造に迫って考えを深めたい／「一人ひとりが避けなければいい」という説教にならないように／差別を知っているのに、差別をどうにかしようとするのではなく、自分だけ回避する（私の幸せを追求する）という構造に目を向けたい／「結婚差別についてもっと話してみたい」という気持ちもあった。それと「みんなの問題として考える」ということ、それぞれ段階をわけて話し合いたい。「みんなで―社会で」は、啓発ぐらいしか思いつかなかった。難しい／「個人が悪い」だと、当事者にならない限り「私のことではない」と思ってしまう。／私たちの振る舞いが社会の構造を支えているということにもうちょっと迫れれば。差別は「する」「しない」だけではなく、不安を感じざるをえない状況自体が差別だというところまで、捉え方が転換されるように迫っていいのでは？　私たちも差別のある状況を支えているのだということに迫って、考えていきたい。

■　試作教材紹介「抗議はコワイ？」

教材開発の動機

「部落は恐い」というイメージには、「糾弾会で抗議されるのが恐い」というイメージがあるのだろうと思われる。しかし、そもそも差別をされた側にとっては、怒らざるをえない状況があるということを理解してほしいという動機から教材を考えた。

しんどい、くやしい思いをした人は怒りの感情を出していいはずだ。それに、激しく訴えないと、加害者はなかなか真剣に向き合おうとせず、ともすると「差別した覚えはない」などと言い逃れられてしまう。ただ一方で、怒りを激しく訴えられた方はやはり「怖い」し、ショックを受ける。自分の罪をつきつけられることは怖いことであるから当たり前なのだが。その結果、抗議を受けた人の中には、自分の罪に向き合う人もいれば、敬遠する人もいるだろう。そこまで掘り下げて考えたい。

ゼミでの実践の様子

参加者からロールプレイに協力してもらう人を３人募り、Ａさん、Ａ´さん、Ｂさんの役をそれぞれ誰がやるか決めてもらう。強い調子で差別に対する抗議をするシナリオ１（Ａさん）と、静かな語り口で差別の痛みを訴えるシナリオ２（Ａ´さん）を続けてロールプレイしてもらう。基本的にＡさん、Ａ´さんの台詞は同じ。

その後、Ａさん、Ａ´さん、Ｂさんの役と、見ていた人たち（オーディエンス）に２つのシナリオを見比べた感想を聞いていった。

実践した際には、シナリオ１、２共に、Ａ役の人は女性（シナリオによって交替）で、Ｂ役は両方同じ男性がロールプレイをしたが、Ａ役については強く攻撃するので男性を意識して演じたなどと、ジェンダーと感情や行動の動きに関わる感想が多く出た。「女性が抗議する場合はＡのように強く言わないと聞いてもらえない。Ａ´のように言っていてはなめられる」「Ａ´の言い方では表面的な謝罪ですまされてしまいそう」といった感想がロールプレイをした人から出た。また、周囲で見ていた参加者からは、Ａさんに対しては「相手に下手なことはいえない。黙っておこう。コワイ。言われている人はかわいそう。怒られるのはもっともだ」といった感想が、Ａ´さんに対しては「懇願しているような印象を受けた。泣き落としのよう。下手（したて）に出ている」といった感想が出された。

また、「あなたが抗議するなら、どちらのスタイルをとりますか？」という問いに対しては、結局は誰でもＡの言い方もＡ´の言い方も使い分けているのだろう、押したり引いたり、相手によっても変えている、ということが話し合われた。

最後のふりかえりでは、「『怒りをあらわにだしてはいけない』思っているから、怒る人を否定することにつながるのでは？というメッセージを出したい」「相手に向き合うよう迫るのだから、迫られた方は恐くて当たりまえ。それを『部落はコワイ』というイメージにつなげてはいけない」といったことが話し合われた。

■　試作教材紹介「〇〇さんから学ぶ」

教材開発の動機

同和地区出身の方の差別体験を聞くなど、人権講演会が様々な形で開催されるが、お話を聞いた後に感想を書いてもらったときに、「大変だったんだとわかった」「がんばってください」といった感想で終わってしまうことがある。きちんと痛みや誇りについて受け止められるような工夫をしたい。

ゼミでの実践の様子

まず、同和地区出身者についてのルポを読み上げて「語り」の代わりとした。

その後「〇〇さんにとって、最もつらかったことは何だったと思いますか？」という問いかけには貧しさや親や家族との関係などが挙げられ、次に「原因は何だと思いますか？」という問いかけから、「時代のせい」「戦争があった」「福祉的社会基盤がない」「社会保障制度がない。あっても知らなかった・使うことができなかった」「相談できなかった」などといった原因が話し合われた。

最後のふりかえりでは、当事者のお話を聞いて、間違っても「〇〇さんはもっとこうしたらよかった」など個人の責任というふうに結論づけることのないよう、社会の問題について迫っていくような「ふりかえりシート」などがつくれればいいのではないかと話し合われた。そうして語りを聞いた後に話し合い、後日「こういうことをしていこうと考えました」と講演者に返すことができるようになれば、大型の人権講演会でも学びが深まるし講演者にとっても話が受け止められた手ごたえを感じてもらえるのではないかといったことが話し合われた。